
魔界の女王

蓮華永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔界の女王

【Nコード】

N41750

【作者名】

蓮華永

【あらすじ】

主人公、黒柳くろやなぎ 嘆樹なげき16歳の女子高生と幼馴染で腐れ縁の白柳しろやなぎ 早月さつき（含む兄）と日々楽しく過ごしていたが謎多き早月兄弟の秘密を知り、自分の本当の存在理由を知ってゆく

序章？

初めまして。私、黒柳くろやなぎ 嘆樹なげき16歳の女子高生です。みんなからは”黒ヤギ”と呼ばれております。

まったく馬鹿馬鹿しいあだ名です。

幼馴染しるやなぎの白柳なつぎ 早月。こいつは通称”白ヤギ”。こいつには様々な疑問がわくが一番不思議に思っている事は何故苗字が似ているのかということである。

もともと親が知り合い同士で名前も似ている。私と早月の兄も名前は似ている。が・・・性格は似ても似つかないほど離れている。早月は能天気でちよつとナルシストで成績は悪い。性格も成績も正反対のようだが名前が似ているのには少し困ったこともあったりする。まあ、私が今思うのは同じヤギでもこう違うとは、ということだ。

早月や早月の兄、銀河ぎんがは謎多き兄弟である。まあ、このことは後に出てくる物と思うが。

私の兄、流河りゅうがは極度のシスターコンプレックスがあり、2歳年下の妹なつきの奈月にもその矛先は向けられている。余談だが、銀河によくシスコン馬鹿兄といわれている。怖いほどのシスコンっぷりだが後に心底怖い話を語ることや約束しまして次の話に移る事にします。

私の幼馴染で腐れ縁である早月は謎も多いが、その性格は明るい”女の子”という性格だ。私としてはうざったらしいやつだとは思うが小さな頃からいるため恨めないやつだ。

とにかく私たちは今現在、ごくごく普通に学校に通っている高校生だ。

序章？（後書き）

こんにちはww。この作品は自分の趣味で描いた漫画をリメイクした物です。

序章？

「ヒギャー――」

朝の静かな校舎に大声が響きわたった。

事の始まりは、数十分前に遡る。

教室内に早月が入ってきた。

「おはよー。・・・嘆樹、あんた・・・ちゃんと髪の手入れしてる？」

早月の問いに対して動揺する嘆樹は

「えっ・・・ああ、うん。」

誤魔化し気味に答えた。

「本当に！？ちゃんとしなきゃだめって言ってるでしょ！！」

お母さんのように叱りつける早月に対して嘆樹は反抗する子供のよう

に
「何で？何でそんなことしなきゃいけないの？別にさ、私の髪の毛なんだから好きにさせてよ」

「いけませんっ！御自分の事だからと言って適当にしないで下さい！」

いきなり敬語になったので嘆樹は流石に驚いた様子で、

「どーしたの？いきなり敬語になったりして・・・大丈夫？」

「貴方がちゃんとしなからです。ちゃんとしてくださいよ！」

でも、嘆樹の中で何故そこまで言われなければいけないのか、という強い疑問があつた

「ねえ、ちゃんとしなきゃいけないのはわかったけど、どうしてそこまでいわれなきゃいけないの？」

「っ・・・それは・・・。とりあえずちゃんとしなさいよね！この黒ヤギがつ！」

ぷっん・・・。嘆樹の頭の中で盛大に何かがキレル音がした。

「だあれが黒ヤギだつてええー！？」

「ヤバッま、待って、嘆樹っ落ち着いて！バット持たないでええ」

序章？（後書き）

二人のある意味日常の会話です。嘆樹はバット。早月は木刀といった感じの武器を持っています。早月が何故敬語になるかは、後々判りますので。

序章？

「流河ッ今すぐ俺を匿えッ！！」

怒声と共に走ってきたのは銀河であった。

「……またかよ……。ったく」

憤っている銀河を多少引きずりながら、流河は自分の影に銀河を移動させる。

そして背中越しに、

「黒柳くんっ白柳くん知らないっ！？」

「いや、知らないなあ。そこを猛ダッシュで走っていったのはみたけどね」

「そうありがとっ！」

走ってきた女子達はそれだけを聞いて走って去っていった。

「……ほら、いったぞ。お前ホントに嘆樹達以外の女子嫌いだよな。……確かお前何故か母親も嫌いだよな？」

「あいつが一番嫌いだ」

「母親をあいつ呼ばわりすんなよ」

「……知るか」

何故かは知らないが銀河は母親が一番「女」の中できらいなのだ。思うにとことん謎な白柳兄妹だ。

そして、この二人の謎一つが近いうちに知る事になるとは思ってもよらない、銀河、流河の日常であった。

序章？（後書き）

はい。兄ちゃんズの日常です。女嫌いな銀河さん。その理由は後々出てきます。それまでお待ちを。

幸せの定義？

不幸っていきなりやってくる。そう、前触れもなしに――

それは何時も通りに時が流れていていた。早月とちょっと口げんかとかして、楽しい時の流れなのに、それは崩れ落ちて行つた。

「黒柳さん！今病院から電話が・・・！」

それは5限目の時に来た。事務の先生が慌ただしく、教室に入つて来た。

「えっ・・・、病院・・・？ な・・・んで・・・」

どうして病院から電話がかかってくるのだろっ。何故？

「嘆樹・・・」

早月が近付いてきた。嘆樹は早月の腕をギュっとなつかみ早月と一緒に職員室に行つた。

「嘆樹！」

向こうから流河の声がした。そちらを見ると、流河と銀河が居た。
「・・・っお兄ちゃん！ なんでっなんで病院から電話がかかってくるの？ どうして？ お父さんとお母さんに何かあったの？」

嘆樹は流河に近付き畳みかけた。流河は、

「判らない。俺も今来たところから・・・」

と言つた。嘆樹は流河の裾につかまり、フルフル震えていた。それを見た流河は少しすらそんな顔をした。そして、白柳兄妹が口を開いた。

「俺達此处で待つてるから」

「行つておいでよ。流河、嘆樹」

「判つた。行くよ、嘆樹」

「うん・・・」

二人に言われ黒柳兄妹は職員室の中に入った。

母親が死んだ。買い物帰り、信号を渡っていたら、トラックが突っ込んできて、即死だった。

それを聞いた時、嘆樹は泣いた。今まで見たことが無い嘆樹の涙をこんな風時に見るなんて思いもよらなかった。

幸せの定義？（後書き）

シリアスです。原作（私の漫画）でもトラックにひかれて死んだって事にしてます。いまさらなことながら、私が書く話って微妙ですが、気にせず読んでいただけると光栄です。

幸せの定義？

嘆樹が泣いた。これまでに一度も泣いたことが無い嘆樹が初めて泣いた。その姿をこんな風に見るとは、誰も夢にも思ったことは無いだろう。

「おにい．．．ちゃっ．．．！おか．．．さん．．．．．が．．．。厭だよう．．．．．お兄ちゃん！」

嘆樹は嗚咽を吐いている。信じられなかった。母親が死んだという事実が。何時も一緒に居てくれた母親。何時も傍で笑っていてくれた母親。もう．．．もう二度と此の手であの手をつかむことが出来ない。もう届かない．．．．．。

「嘆樹．．．。嘆樹．．．！」

嘆樹を力強く抱く流河。そのすぐ傍で早月が泣いている。銀河はそんな早月をギュッと片手で抱いている。

「おば．．．さん．．．．．！」

どうして、幸せは簡単に壊れてしまうのだろう。どうしていきなり壊れていくのだろう。幸せは案外もろいものだ。きっと何よりももろいだろう。

もつと傍に居たかった。もつとずっと傍に居たかった。お母さんの傍に居たかった。もつともつと．．．、家族皆で幸せな時間を過ごしたかった．．．。

「嘆樹！流河！」

男の人の声が病院内に響いた。

『親父！．お父さん！』

二人が同時にその人．．．、父親を呼んだ。父親は二人の傍に来て、二人を両手で抱いた。

「お父さあん．．．！お母さんが．．．厭だよう．．．！傍を離れないでえ．．．．．！お父さんっお兄ちゃんっ！」

「ああ、ああ。離れない、離さないから」

「嘆樹・・・」

つらいだろう。なんせ嘆樹は幼少期の記憶が無い。その分悲しさ
が募る。

「もう・・・厭だぁ！」

嘆樹が叫ぶ。その声は病院に響いた。

幸せの定義？（後書き）

ザ・ドシリアス！

こんな話でも末永くよろしく願います！

飽きずに読んで下さると、光栄です！願います！
それでは次回お会いしましょう。

幸せの定義？

家に帰ってすぐに嘆樹は寝た。

「お父さん・・・お姉ちゃん大丈夫なの？・・・御免なさい合宿に行つててすぐこれなくて・・・」

今喋っているのは嘆樹の妹、奈月である。奈月は今言っていた通り合宿に行っておりすぐに病院に行けなかった。

「大丈夫だ。嘆樹はそんなやわじゃ無い」

「そうだよ、奈月。嘆樹は大丈夫だ」

そう言つて二人は奈月を慰める。

「でも・・・今まで一回もお姉ちゃん泣いたこと無かつたんでしょ？そのお姉ちゃんが無くつてことはそれほどまでに心が傷ついているでしょ？だつたら・・・大丈夫じゃないはずよ」

「・・・」

奈月の言つたことに二人は黙つた。

「厭だよ・・・お姉ちゃんがあんなふうに傷ついているの見るの・・・」

「

それは二人も同感だつた。あんなふうに傷ついた嘆樹は初めて見た。そしてもう見たくないと思つた。

一方白柳家は。

「ねえ『ツキア』兄さん。『姫』は大丈夫かな・・・？あんな『姫』

、『久しぶり』だよ・・・。『王』と『女王』が『お亡くなりになったときもあだつた』・・・もう厭だわ、あんな『姫』見るのは」

「それは俺も同感。『姫』は強がりだから、何時も誰もいないところで泣いてた。『あそこに居た時は』・・・早く『時』が来れば『姫』を『あつち』に連れていける・・・。それまであと少しだ」

「判っているわよ・・・！それぐらい！でも・・・『大魔王』が」

まだ』だって言うし・・・。」

「赤月夜まで・・・あと少し・・・。」

そう言った銀河の目は少し涙目になっていた。

幸せの定義？（後書き）

さあ二人の謎が大きくなるばかりですね。解明するはずなのに・・・。

もう御免なさい。本気で・・・。

まあそんなことを気にせず読んでいただけると光栄です。
それでは次回お会いしましょう。

存在意義？

『パール……お前は俺たちを……助けてくれるのか？』

『当たり前です！ だって貴方達は……』

何だろう……懐かしい声がする……。そうだ此の声は私の……。

頭が痛い。寝過ぎた所為だ。どうしよう起きれない……。起きたくない……。あれが夢だったらどれだけいいだろうか……。夢だとしても悪夢だ。

「おか……さん……」

何時も傍に居てくれた。小さい頃の記憶が無くても一つずつ色々教えてくれた。ゆっくり時間をかけて。色んな事を教えてくれた。

「嘆樹。起きてるか？朝ご飯出来てるぞ」

流河がノックをした後入って来た。

「お兄ちゃん……。……。朝ご飯……。食べる……。……」

「

グウーと小さくだがお腹が鳴ったので、顔を赤くしながら言ってきた。

「……。クツ……。！くつくつくつく……。……」

「お兄ちゃん酷い……。！」

流河は笑っていた。お腹が鳴ったのも十分に面白いが、嘆樹が少し元気になったので、嬉しくて、その意味も込めて流河は笑っていた。もちろん嘆樹は流河がそんな事思ってるとは知らない。

「お姉ちゃん、お兄ちゃん！ 御飯！ いいの？ 食べなくて？」

『食べる食べる！』

黒柳家は少しずつ何時も通りの日常に戻ろうとしていた。だけど、何時か嘆樹は此の『普通』の幸せを送れなくなる。だけどそこに待っているのは決して『絶望』では無い。

そこに待っているのは嘆樹の『本来の存在意義』なのだ・
・
・
・

存在意義？（後書き）

シリアス抜けたと思ったたらまたチビシリアス。どーなってんだか。
シリアス続きですが読んでいただけると光栄です。
それではまた次のお話で・・・。

存在意義？

「嘆樹見て！ 髪後ろだけ切ってみたの！ どう？ 似合う？」

「似合うも何も・・・何で切っちゃったの！ 綺麗だったのに・・・長くて手入れのしてある、黒髪・・・」

外に出て早々に早月が玄関前に居て、髪が短くなっていた。しかもみあげだけ前の髪の長さ変わらず、後ろだけ、ショートカットになっていた。

「だって、『宝』が此の髪型になってて、いいなって思ったんだもん・・・」

「へ？ 今なんて言った？」

今早月が何か言った気がするが、早月は「べつにー」と言っ歩き出した。久しぶりに此の4人での登校だ。嘆樹は嬉しかった。久しぶりで、昨日までつらく重いものを背負っていたけど、皆で居ると、楽しくて、忘れちゃいけないけど、少しの間だけ、忘れられる。

御免なさい。私の大切な『姫』――。

貴女の大切な『普通』の日常を奪ってしまうのを赦して・・・絶対守り続けますから・・・。

生涯貴女に尽くすと誓った・・・・・・・・、『あの日』に――。

存在意義？（後書き）

最後のは誰の言葉でしょう。

まあ気にせず読んでいけばいつか判ると思います。

よろしく願います。

存在意義？

「『時は来た』。今こそ・・・、『姫』をこちらに連れてくるので
す――。サファイア」

「判った・・・。ツキアとルビにそう言ってくる」
「よろしくね・・・」

膝に届くほど長い髪が桜と一緒に舞う。

「新学期かぁ・・・。なんか実感わかないや・・・。」

嘆樹は呟いた。今日から2年生だ。

「嘆樹！ どうしたの？ ボーっとしちゃって・・・」
後ろから走って来た。

「あ、お早う早月。んー、ほらなんか実感わかないなぁと思って・・・」

そんな嘆樹を早月は少し、つらそうな・・・何かに対して、罪悪
感がある様な顔をした。嘆樹は気づいていないけど・・・。

「お迎えに・・・上がりました・・・。我が姫・・・」

「え・・・？ 早月・・・？ ・・・っ・・・！！」

嘆樹の視界がグラリと揺れた。

な・・・に・・・？

「兄さん。早く・・・言っちゃ悪いけど、重い・・・。」

「言っなよ、『姫』に対して・・・。不敬罪だぞ」

電柱の陰に居た、銀河は気絶した、嘆樹を抱き上げた。

「『姫』・・・。おい『ルビ』、お前より軽いぞ、『姫』は」
「黙れ・・・！ とりあえず、ゲート開けなきゃ」

「開きます。名は、ルビ＝アルフィエス、ツキア＝アルフィエス。

パール＝ミカエリスを連れてきました。』」

早月・・・、ルビがそう言うのと突然扉が現れ、ギギギギ・・・と
音を立てて開いた。

「じゃあ、行こうか、兄さん」

「ああ・・・」

二人はその扉を潜って行った。そしてその扉は閉まって、消えていった。

存在意義？（後書き）

。 パンダ・・・、パンダをもふもふしたいです。 いやしてほしい・・・

こんな作者ですが、これからもよろしく願いしますね。

存在意義？

綺麗な銀髪に、碧と紫のオツドアイ。やっと――。

「やっと会えた。パール……」

『あの時』、俺『達』を助けてくれた。だから、今度は――

声が出た気がする。聞いたことのある……、だけと思ひ出せない。

「……。此処……何処？」

嘆樹は起きてすぐに首をかしげた。何故なら、自分は全然知らない所に居て、しかも今まで自分が寝ていただと予測される、ベッドは天蓋付きベッドなのだ。もう何が何だか訳の判らない事になっていると、混乱しているとノック音が聞こえた。

「入りますよ。あつ、起きていらしたんですね、『姫』」

入って来たのは、早月だった。

「早月……？ 今私の事なんて呼んだ？」

「『姫』と……、呼びましたけど……、何か？」

平然と冷静に答えた早月は優しく嘆樹に微笑んだ。

「『何か？』 ツじやなー！ーっ！ーっ！ 何？ 何で『姫』なの！？ なんで敬語なの？ どうしちゃったの？ 早月！？」

「私の名前はルビです。『早月』は偽名です。姫……、もちろん貴女も『嘆樹』が本名ではありません。貴女の名は『パール』ミカエリス」。そして、此の城、此の国の主です」

早月……、ルビはゆっくり言った。優しく、ちゃんと嘆樹が……、パールが理解出来る様に。その口調が母親に似ているな、と一瞬場違いにも思ってしまった。

「そ・・・そんな事・・・、言われても・・・。厭、厭よ・・・。帰して、今すぐ私を家に帰して！　ねえ、早月！　冗談よね？　夢よね？　ねえ、何か言つてよ、どうして？　どうして黙つてるの？　どうしてよ！　もう・・・、厭だ・・・。私を、今すぐ帰してよ。私をお父さんたちが居る所に帰してよ・・・。お願いよ・・・」

パールは訴えかけるが、ルビは黙つたままだ。ただ、その顔は悲しそうにつらそうに、罪悪感を抱いているような顔だった。

「もう・・・」

「早月・・・？」

ルビは何かを呟いた。パールはそれを聞き取れなかったが、ルビが顔を上げた。

「もう、私たちには貴女しか居ないのです！　此の国の希望は・・・救いは貴女のみなんです！　貴女しか、私たち、国民を助けられるのは・・・、貴女にしか、此の国は救われないんです！　ですから、どうか聞き分けて下さい・・・。私だって本当は貴女に無理強いなど、したくはありません・・・」

それは痛切なる願い。ルビだって本当はずっとパールに幸せに暮らしてほしかった。だけど、主が長期不在だと此の国はおかしくなる、だから、主が必要なのだ。

「お願い・・・です・・・」

泣いていた。ルビは訴えながら、俯うつむいて泣いていた。

存在意義？（後書き）

パンダーーーーーー！

此の叫びは気にしないでください。

これからもどんどん更新するので読んで下さいね？
お願いします。

存在意義？

受け入れられない。どうしても、受け入れられない。幾ら大切な友人が泣いていても、そんな重大な事、すぐに受け入れられる方がおかしい。

そして、何か今引つかかったものがある。此の子は今『貴女しか、希望が無いのです！』と、言った。つまり、それは――

「ねえ……。どういうこと？　もしかして……。私のお母さん……」

そう言いかけると、ルビは顔を上げた。まだ瞳が濡れている。

「……ご察しの通り、貴女のご両親はとうに亡くなっておいでです……」

パールは目を見開き、固まった。「嘘だ……」と呟いた。嘘だと言ってほしい。

「嘘……。よ……。じゃ……。じゃあ私の今までの両親は？　何？　お父さんは？　お母さんは？　お兄ちゃんも、奈月も……。全部……。偽物なの……？」

「あの人は、少し記憶を弄らせていただき、それで……」

「じゃあ、今は？　まだ私の事覚えてるの……？」

パールは聞いた。記憶を弄り、あの『家族設定』をやったなら、今はどうだろう。今自分は訳の判らない場所にいる。記憶を弄れるなら、下手したらもうすでに自分の事を覚えていないだろうか？

「もう、貴女に関しての記憶は消させていただきました。ご了承ください……」

もう、厭だ。予想通りもう消されていた。もうあの空間に戻れない。ならば、今の自分に出来ることは……。

「……！　もう、厭！　判ったわよ！　それならなってやろうじゃない！　その当主とやらに――」

今の自分に出来ること、それは、吹っ切れること。それ以外に無しと考える。

「はーはっはっはっはっ！なってやるわよ！ なってやるうじやないの！」

ルビは此の時、パールが壊れた。と思っていた。もちろん、そんな事は死んでも言わないが。

存在意義？（後書き）

なんだっただろう。

前までのシリアスムードは。

まあそれが私の小説なのです。ですから、これからもよろしく願いますね。

当主の仕事。

簡単に・・・、と言うか、ヤケクソになって、受けてしまった『御当主』は、予想外だった。

「つ・・・、疲れた・・・。何これ・・・地獄でしょう、コレ・・・。」

「姫、大丈夫ですか・・・？　大丈夫じゃ、なさそうですけど・・・。」

ベッドの上ではてているパールの傍には、ルビが控えている。物凄くばてているパールを見て、ルビは苦笑交じりに言った。

「ですが、頑張つて下さい。頑張った暁には、ご褒美が待っていますよ？」

その言葉にパールはピクツ、と反応して、ガバァツ、と起きた。

「本当！？　今の本当に？　やったー、ご褒美！　頑張ろう！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・姫・・・・・・・・・・・・・・・・」

「」

ルビは半分呆れていた。今まで、ずっと傍に居たが、本当にパールは甘いものに目が無い。こういう所がいいんだろうが、直してほしいとも思う。

コンコン。

「入ります。姫、昼餉ひるめしの準備が出来ました」

「！　ツキア！　判った、今すぐ行くツー！」

パールはダッシュで、食堂に向かった。走り去った背中をルビは溜息をしながら、ツキアは苦笑しながら、見守っていた。

当主の仕事。（後書き）

魔界での生活其の一。

パールはよく食べるくせに、太らない。そして、172センチメートルの50キロ。

高っ！軽っ！ですよ。

まあ、私の趣味の象徴みたいなものですな。

神玉石

神玉石^{かんぎよくせき}、それは此の魔界に宿る神の石。

アクア、ルージュ、ノワール、シャイン。

それぞれ、『水』、『炎』、『闇』、『光』を司り、それぞれ、『アクア』、『ルージュ』、『ノワール』、『シャイン』の国が在り、それぞれの国でそれぞれの石を祀^{まつ}っている。

そしてこの石が此の世界の均衡^{きんこう}を保っている。

つまり、此の石が一つでも欠ければ、此の世界は無くなる。

そして、この神玉石は、ノワールが守る『闇』の国に在る。

「と、言うわけで、本日は其の神玉石を見に行きましょうね。姫
「はい」

パールはルビに一通り、魔界についてと、神玉石について教えてもらい、ついにて、神玉石を見に行くことになった。

「で、思ったんだけど。なんで、此の国に全部有るの?」

「・・・、申し訳ありません。其処までは存じ上げません」

「そっかあ・・・」

不思議に思った。何故それぞれを祀っている国にそれぞれの石が無いのだろう。何故全て此の国に、此の城に有るのだろう。

「此方^{こちら}です、姫」

「知らない人だ・・・」

もう一人は、少年で、綺麗な銀髪で、瞳は黒色だ。

「ノワール・・・、私まだ眠いわ・・・」

最後の人は女の人で、綺麗な金髪で、瞳は黄色だ。

「えーっと・・・」

パールは混乱していた。だが、そんなパールを余所に、紅髪の少女は挨拶を始めた。

「初めまして。私はルージュだよ」

続いて、金髪の女の人。

「初めまして。私はシャインよ」

次に銀髪の少年。

「初めまして。僕はノワール」

最後に藍髪の男の人。

「初めまして。俺はアクア」

とりあえず、外見通りのだったが、何故ノワールは銀髪何だろう・・・。聞いて見ることにしたパール。

「ね・・・ねえ・・・。答えにくいんじゃないけど。ノワール、一つ聞いていい？」

「髪の事ですか？ これは突然変異ですよ」

「そ・・・、そうですか・・・」

聞く前に答えられてしまった。

つらそうだった。それを聞いたとき・・・、と言いか、答えた時、ノワールはつらそうだった・・・。

神玉石（後書き）

神玉石登場！

とりあえずこいつらをさっさと出したかった・・・。

ノワール（前書き）

本日はノワールの一人称でお送りします。

ノワール

やっぱり聞かれた。そりや不思議に思うよね。『闇』の神なのに、黒髪じゃなくて、銀髪……。

『今代のノワールはおかしいぞ。選ばれたって言うのに、銀髪はまだ。何であんなのに闇の力が宿っているんだ？』

だから、僕はなるのが厭だったんだよ……。

「あ、居た居た。ノワール」

「……姫？ 何で此処に？」

「んー？ 心配だったから……。悲しそうな顔したでしょ？ 私が貴方の髪について聞いた時……。だから……」

「あ……」

気づいていたんだ……。姉さん達でも気付かなかったのに……。

「御免なさい……。貴方にとって一番つらいことを聞いたみたいね……」

「いえ、其処まで気にしないで大丈夫ですよ……。慣れてますし、言われるの……」

僕が言った後、姫は目を見開いた。

「知った様な口を聞いてしまうかもしれないけど……」

姫はそう前置きをして言った。

「悲しいね、慣れてしまったことが……」

「っ……！！」

痛いところをつかれた。それでも言い返さないのは、姫が……。姫が余りにも自分のことのように、つらそうな、痛そうな顔をしているからだ。

そんな顔をしないでいいのに。そんな自分のことのように、つら

そんな、痛そうな顔をしないでいいのに。

「そう……、ですね。慣れが一番悲しい事ですね……」

こんな事、先代にも言われたことが無い。あの人は、ずっとアクアと一緒に居たからな。

そう言えば、顔が似ているな、先代と。

ノワール（後書き）

微妙な終わり方ですね。

屍

「言っておくが、俺は確かにアクアだが。アクアは今俺の中で眠っている。だから俺は屍だ」
しむね

理解不可能。

その単語がパールの頭を通過した。

「ついでに屍は俺の本名だからな」

「どういう名前よ!？」

「ツツコムところが違うだろ・・・」

屍はめんどくさそうな顔をしつつも一から説明をした。

アクアは眠っている。『器』である、屍の中で・・・。何らかのシヨックで眠ったままの・・・、一度も出てこない。

「そう・・・」

「前代未聞なんだつてよ・・・、始祖しそが眠ってしまうなんて・・・。しかも、棺ひつぎの中じゃなくて、『器』の中で眠るなんて・・・」

「初めまして、姫。私の名は宝たから＝クローディと申します」

「初めまして・・・。ルビと同じ髪型・・・、それに顔も微妙に似てる・・・」

「髪型はルビさんが私のを真似たんです。顔はよく言われます。似てるって・・・」

「へえ」

本当によく似ている。鏡映しかと思うぐらい・・・、物凄く・・・。

「それにしても綺麗な茶髪ね・・・」

「……………姫、ルビさんに教わりませんでしたか・

…？ 此の世界では茶色は不吉な色だと……………。天界に茶

髪の方が多いから、茶色は不吉な色だつて……………」

「教わってません」

「ルビさん……………」

宝は呆れたと顔に出しながら、パールに出す、お茶の用意をした。

屍（後書き）

宝さん登場！

此の人もさつさと出したかった・・・。

サファイア色の瞳

「初めまして、姫。俺の名はサファイア＝クロードイと申します。これからよろしくお願いします」

「初めまして。私の名は、ダイヤ＝クロードイ。サファイアと宝の義母です」

「初めまして。…って、言っても私は記憶無いから、以前にもあったことがあるんだろうけど……」

「「当たり前です」」

即答されました。

今日挨拶をしたのは、サファイアと義母のダイヤ。

サファイアは茶髪だった……。でも、瞳は名前と一緒にの碧色……。
「つらいんだろうなあ……」

ただ、天界に茶髪が多いからと言って、茶髪が不吉な色だなんて……。

あつちでは、こっちが多い、銀髪が不吉だって言ってたっけ……。……。

「やっと、会えた……。やっと、これで、俺と壱と三人で……。三

人で……」

綺麗な碧い瞳が涙で濡れている。

サファイア色の瞳（後書き）

シリ阿斯去ってーーーーー！

お願いだから、私にコメディをおーーーーー！！！！

プロフィール(前書き)

女王に出てくるキャラを整理したいと思います。

下手したら、まだ出てないキャラが書かれているかもしれません、
悪しからず・・・。

プロフィール

黒柳くろやぎ 嘆樹なげき ↓ パールⅡ ミカエリス

年齢：16歳

性別：女

身長：172センチメートル

体重：50キログラム

容姿：髪は銀で膝に届くほどの長さ。瞳は碧と紫のオッドアイ。

特技：勉強。運動。料理。

趣味：運動。読書。音楽鑑賞。

備考：幼少の記憶が無く、記憶は魔界にて消えた。両親ともに他界。純血の吸血鬼。ヴァンパイア

白柳しらいし 早月はやつき ↓ ルビⅡ エルフィエス

年齢：（外見年齢）16歳

性別：女

身長：168センチメートル

体重：54キログラム

容姿：髪は黒に近い藍色。髪型は横の髪一房ずつ長い、ショートもどき。瞳は紅色。

特技：弓道。魔術など。

趣味：（以前は）流河苛め。宝弄り。

備考：幼少の頃からパールに仕えており、パールを傷付ける者には一切容赦なし。混血の吸血鬼。

白柳 銀河^{ぎんが}↓ツキアエルフィエス

年齢：（外見年齢）17歳

性別：男

身長：179センチメートル

体重：74キログラム

容姿：金髪碧眼。

特技：勉強。柔道。剣道。

趣味：音楽鑑賞。読書。（以前は）流河弄り。サファイア弄り。

備考：先代、つまりパールの両親達が生きていた頃からずっと城に従者として、仕えていた。女嫌いとその理由は母にある・・・？

月^{ゆえ}Ⅱエルフィエス

年齢：1000歳位

性別：女

身長：170センチメートル

体重：58キログラム

容姿：銀髪翡翠。

特技：特になし。

趣味：特になし。

備考：ルビとツキアの母。先代の頃からずっと、仕えていたが、今は療養のため、家にこもっている。

宝^{たから}Ⅱクローディ[↓]ルナⅡエルフィエス

年齢：（外見年齢）16歳

性別：女

身長：169センチメートル

体重：54キログラム

容姿：茶髪で髪型はルビと一緒に。瞳は紫。

特技：これと言ったものは無し。

趣味：読書。サファイア弄り。

備考：顔はルビと瓜二つ。大体5、6歳の頃にダイヤに拾われた。
実はルビの双子の妹。

サファイア⇨クロードイ↓零⇨ミカエリス

年齢：（外見年齢）18歳

性別：男

身長：183センチメートル

体重：78キログラム

容姿：髪は茶色。瞳は碧色。

特技：特になし。

趣味：宝弄り。ダイヤで遊ぶ。

備考：サファイアも拾われていて、宝と同じ日に拾われた。過去にパールと何か、関係があった様で……。実はパールの兄。壱の双子の兄。今は髪を黒に染めている。パールと同じく純血の吸血鬼。

ダイヤ^Ⅱクローディ

年齢：（外見年齢）24歳（大） 13歳（小）

性別：女

身長：167センチメートル（大） 146センチメートル（小）

体重：？キログラム

容姿：髪は黄色で腰のあたりまで伸ばしている。瞳はオレンジ色。

特技：特になし。

趣味：宝、ルビ弄り。

備考：ダイヤは時々身体が大きさが変わってしまうため、服は特殊構造。

かんぎよくせき
神玉石

ノワール

年齢：（外見年齢） 15歳

性別：男

身長：177センチメートル

体重：？キログラム

容姿：銀髪碧眼。後ろ髪の二房だけ、膝あたりまで伸びている。

備考：シャインの弟。今代のノワールに選ばれたが、髪が黒くならず、自前の銀髪のまま。ノワールになるのは厭がっていた。本名は不明。

シャイン

年齢：（外見年齢） 20歳

性別：女

身長：165センチメートル

体重：？キログラム

容姿：金髪で腰のあたりまで伸びている。瞳の色も金。

備考：ノワールの姉。ブラコン。屍のことが好きだが、嫌い。

ルージュ

年齢：（外見年齢） 15歳

性別：女

身長：155センチメートル

体重：？キログラム

容姿：髪は紅色。瞳は少し黒に近い、紅色。

備考：屍の妹。ノワールの事が好き。

屍ノアクアしかばね

年齢：（外見年齢） 25歳

性別：男

身長：185センチメートル

体重：？キログラム

容姿：（アクア）藍色の髪に横髪一房だけ黒。瞳は碧色。（屍金髪に一房だけ紺こん。瞳は紅色。

備考：ルージュの兄。何らかのショックでアクアが『器』である

屍の中で眠ってしまった。ただ、アクアが『眠っている』だけで、未だに身体に宿っているのも髪の色などはアクアのまんま。屍はノワールの事が好きなホモ野郎。アクアは恋人がいた。

壱〃ミカエリス

年齢：？歳

性別：男

身長：183センチメートル

体重：78キロ

容姿：白髪で、瞳の色は紫色。

特技：特になし。

趣味：零弄り。読書。

備考：零の双子の弟。パールの兄。パールが記憶を失くす前までは、ずっと一緒だった。何よりもパールを大事にしている。

ザクロ〃カミスリート

年齢：？歳

性別：男

身長：190センチメートル

体重：79キロ

容姿：紫色の髪に紅色の瞳。

特技：銀色の細い糸で人を操る。

趣味：煤皇、零、壱弄り。

備考：皆に「ダンナ（旦那様）」と呼ばれている。パールを欲しがっている。

煤皇^{めがみ}Ⅱナストレイ

年齢：？歳

性別：男

身長：171センチメートル

体重：65キロ

容姿：黒髪翡翠。髪は腰ほどの長さ。

特技：特になし。

趣味：嘉皇弄り。零苛め。

備考：ザクロの命令（趣味）により、女の恰好をさせられているが、本人もノリノリ。嘉皇の双子の兄。二卵性。

嘉皇^{かがみ}Ⅱナストレイ

年齢：？歳

性別：女

身長：171センチメートル

体重：53キロ

容姿：白髪翡翠。髪は短い。

特技：是といったものは無し。

趣味：料理。

備考：煤皇の双子の妹。ザクロに忠誠心を誓っている。

カゲキ

年齢：（外見年齢）17歳

性別：男

身長：179センチメートル

体重：74キロ

容姿：黒髪紅眼。

特技：特になし。

趣味：特になし。

備考：ザクロと契約をしており、パールに逢いたいがあるものをなげうった。

プロフィール（後書き）

これからもキャラが増えて、
気が向いたら増やしていきます。
追加しました。

日常？

「ツキアさん、姫を見ませんでしたか？ 先ほどからお見かけしないのですが・・・」

「ああ・・・、多分書庫室に居ると思う・・・。。それでいなかったら、ルビに聞くといい。それであいつが探しに行くから・・・

「……姫は私が見つけます……」

「そうした方がいい……」

宝は慌てて探しに行った。

ルビはきつと卒倒して、凄^{ひど}い勢^{いき}いで探す。其処^{そこ}まではいいいんだが、探^{さが}した後、ルビは怒^{いか}る。泣^なきながら、パールを怒^{いか}る。

「まったく……歳が近いからって……。不敬罪だぞ。」

•
L

ツキアはゆっくりと眼を閉じ、そつと眼を開け、溜息をついた。

一方パールと言えど……。

「……。覚えてはなんだけど……。此処何処？」

絶賛迷子中。覚えたはずなのに、城の中で迷った。

「どーしょ……。ルビに怒られる……」

ルビは普段優しいが怒ると怖い。パールの為だと言って、判

「うっすん」

「姫！！ 此処にいらしたんですね！？ よかった・・・」

「！！宝！よかったあゝ。覚えたはずなのに、迷子になっちゃ

つて・・・」

「そうですね・・・。とりあえずご無事でよかったです・・・」
宝は息を切らしながらも微笑んだ。パールの少し微笑んだ。

日常？（後書き）

姫の城での日常です。

これからも色々ありますよー。

日常？

「で．．．？ 何故姫は迷子になられたんですか．．．．．？」

．．．．．、只今ルビに説教．．．、尋問されております。

「御免なさい．．．．．。書庫室で借りた本を読みながら帰ってきてたら、迷子になってた．．．」

「．．．．．」

沈黙が逆に痛い。今痛切にそう思ったパールであつた。

「．．．．．これ以上心配をかけないで下さい．．．．．
．．．．．心臓が止まるかと思いましたよ．．．．．」

「．．．ご、御免なさい．．．．．」

「これからは気を付けて下さい．．．．．」

「ハイ．．．．．」

パールはすっかりしょぼくれていた。流石にルビは冷汗を掻き始める。だって、後ろのツキアの視線が痛い。物凄く痛いからだ。

「姫。怒り過ぎたお詫びに本日の勉強は無しにします。その代り読書です」

「．．．！！ 有難う！ 好きよルビ！！」

「！！ 有難う御座います！！．．．．．」

ルビはパツと顔を明るくさせたが、すぐに曇らせた。だって、ツキアの顔．．．、視線が殺氣に変わったからだ。

「．．．．．」

「さ、姫。行きましょうか．．．．．」

「？ うん。どうしたの？ 顔色悪いよ？」

「大丈夫です！！」

「．．．そう．．．．．」

日常？（後書き）

ツキアは一途な男の子ー。というか青年ー。
あー、弄れるから面白いです。

日常？

「姫、私は貴女に忠誠を誓う気はありません。が、貴女とお友達になりたいのですが。よろしいでしょうか？」

それは、シャインが突然言ってきた言葉だ。パールはぽかんと口を開けた。

「おともだ・・・ち・・・？」

「はい。私はルージユ以外の友人が居ないのです。ですから、私と友達になっただきたいのです」

シャインは淡く微笑み、そう言った。

ルージユ以外に友達が居ないと言った。此の光の神は――。

パールはすぐさま応えた。

「うん。私でよければ・・・、と言つか私からもお願いするわ。私と友達になってくれる？」

「はい、よろこんで」

パールとシャインは笑いあい、手を握った。

「ずるい！ シャインだけずるいわ！ 私だって姫と仲良くしたいのに――！」

二人で色々と話し合っていると、ルージユが割り込んできた。ルージユは頬を膨らませ、パールとシャインの間に入った。

「姫！ 私とも仲良くして下さいね？」

「うん。大歓迎。嬉しいわ」

パールがそう言つとルージユはパアアと顔を輝かせ、ニコツと笑った。

「よろしくお願いします。姫！」

「成程。だから、ルージュは姫にべったりなんだ」

ノワールは余り興味なさそうな声でそう言った。実際興味は無いだろうが……。

「ええ、さつきからべったりくっついてるの」

パールがそう言うと、ノワールは思案に暮れたのちに、手を伸ばし始めた。

「!!!? ちょっと、ノワール何するの!!!」

「……? 何でだろ、なんか姫が他の人に抱きつかれている姿が気に食わなかったから……かな?」

「かな? って……」

パールはノワールの言った言葉に苦笑した。

「だからと言って、皆でパール嬢にくっつかなくてもいいんじゃないか?」

屍の言ったことに、パールは激しく同意した。だって、三人にさつきからくっつかれているからだ。何故ノワールまで!? と大声で言いたいのが、声を出すと、ルビが来て、対抗心を露わにして、くっついてくるに決まってる。

「取り敢えず、ノワールが他の奴にくっついてるのは、厭だ」

屍はそう言うと、ノワールをパールから離れた。

「何すんのさ、屍……」

「さつきも言ったが、お前が俺以外の者にくっついてるのが気に食わない。厭だ」

「このホモ野郎……」

「なんか言ったか？」

「言った。この、ホモ野郎」

パールはノワールが大声で言った言葉に呆然としてしまった。

「・・・屍って・・・ホモなの？」

パールは恐る恐ると言った態度で聞いた。すると、屍がこくりと頷いた。

「ああ、と言ってもノワール限定だ。それに『アクア』のは恋人が居たらしい」

「・・・、そうなの？」

「らしい。詳しいことは知らないが、居たらしいぞ」

「ふーん・・・で、『器』はホモな訳ね・・・」

パールは屍を拒絶するかのような、眼で言った。

日常？（後書き）

こつというのが日常だと、言われると、きっと
つらいだろうなあ・・・。

まあ、面白そうですけどね。

戻る記憶？

パール、パール……。

もう一度、君に会いたい。

もう一度、君を抱きしめたい。

また、『三人』で笑い合いたい。

「パール……………」

白い髪が、月明かりに照らされている。

「……………壺……………」

サファイアは唐突に其の名を呼び、月を見た。

眠れない、寝られない。何か頭に声が響く。

——『僕を裏切ったな！　パール〓ミカエリス！！』

「っ！！？」

何…………？　今の…………。

パールは耳を塞ぎ、泣いた。

何か、覚えていないくらい記憶が、胸を締め付ける……………。

「……………姫、眠れなかったんですか？」

「うん……………なんか頭に声みたいなのが響いて、全然眠れなかった……………」

「そうですか……………」

ルビはパールに紅茶を出した。

「有難う……………ふう、大分楽になったわ……………。美味しいわね是」

「ハーブです。ハーブには鎮静効果がありますから」

「パール嬢、どうした。少し顔色が悪いぞ」

「お早う、屍。少し夢見が悪くて、寝付けなかったのよ」

「成程。少し昼寝をしたらどうだ？」

屍はパールの食後のデザートを一つつまんで、食べた。其の時、ゴンツ！と音がした。

「屍様……………。幾ら神であつても姫のお食事を勝手に食べることは許しません。しかも、立つて食べるなど、行儀が悪いです……………」

「ぐおおおおおおおお……………！痛いぞ、ルビ」エルフイエス…………ツ！」

「反省なさい！ 屍様ああああああッ！！」

「ぎゃああああああああああああああああっ！……………」

パールの隣で屍の悲鳴が響く。

「ふう……………、美味しいわ」

パールはお構いなく、紅茶を飲み続けた。

「で、屍はこうなっていると……」

「ええ。今すぐお持ち帰りください」

ルビはニツコリと黒い笑みをノワールに向けた。

「判った。姉さん、是お願い」

ノワールは隣に居る姉、シャインに屍の『屍』を渡した。

「判ったわ……」

シャインはノワールから屍を受け取ると、ずるずると引きずりながら、屍の部屋へ行った。

「お騒がせいたしました、姫。屍が迷惑を掛けた様で……」

「大丈夫よ。気にならなかったし」

「大分姫が一番酷い気が……」

ノワールは少し微妙な顔をした。

戻る記憶？（後書き）

ああ、新しい章に入りました・・・。
きつと此処でパールの記憶が戻る・・・。

戻る記憶？

何か、抜けている気がする。

記憶ともう一つ、何か抜けている気がする……………。

——「パール……………」

声が、響く。懐かしい声……………。

——「お前とまた会えるよう……………、願うよ……………」

ああ、此の声は、私の……………。

パールはゆっくり眼を開いた。寝ていたはずなのに、涙が零れている。

「やっと、やっと思い出した……………」

失くした記憶が……、思い出が、今、蘇った……。

「『あの人達』は……、私の……『大切な人達』……」

あの日、あの時、一緒に居られなかった……。

だから、次は、永遠に一緒に――。

「ね、歴代の王・女王等の名前が載っている物とか無いの？」

「え？ ありますよ。確か、旧書庫室に……」

「じゃ、見せてッ！」

パールは乗り出し、ルビに叫んだ。

「は……、はい……」

ルビはたじろぎながら返事をし、パールを案内した。城の最上階にある旧書庫室はパールがよく行くところとは少し違った。パールがよく利用する新書庫室は離れにある。

「凄い……、綺麗……」

綺麗なステンドグラス。天井まである本棚には数千冊以上あるだろうと思われるほどに、沢山の本が詰まっている。

「えーっと……。あ、ありました。これです」

パールはすぐさまそれを受け取り、パラパラと捲り始めた。目的の名は、『サクラミカエリス』。自分の母親である。

第347代当主 女王 ハイナミカエリス

王 ケイトⅡミカエリス

長女 パールⅡミカエリス

次女 翔空Ⅱミカエリス
とあ

三女 サクラⅡミカエリス

第348代当主 女王 サクラⅡミカエリス

王 神楽Ⅱミカエリス
かくら

長男 壱Ⅱミカエリス
いち

長女 パールⅡミカエリス

パールは呆然とした。己と同じ名があることにではなく、他の事に……。に。

「な……んで、『無いのよ』…………ツ!？」

目的の名を見つけたが、後『一つ』…………、足りない。自分の『記憶』にあるのと違った。

「どうしてよ……!」

戻る記憶？（後書き）

意味のわからない話になって来た気が・・・。

戻る記憶？

どうして、どうして『あの人』の名前が無いの？

どう、して――？

「姫？ どうされたんですか？ ぼうつとして……………」

「なん、でも……………ない……………。何でもないわ……………。ただ、眩暈がしただけ……………」

パールは本棚を支えに立っている。本気で眩暈がしたようだ。ルビは心配になり、パールを支え、書庫室を出た。

どうしてなのッ！！

パールは其のまま気を失った。

「姫ッ！！？」

ルビはパールを背負い、廊下を歩いていた。其処に、サファイアが通りかかった。サファイアは気を失っているパールを見ると、眼を見開き、歩いてきた。

「おい、ルビッ！ 姫はどうしたんだ！？」

「判りません。書庫室にある歴代の王・女王の名が載っているのを見て、顔色を悪くいたしましたして、気を失ったのです……………」

ルビは正直に答え、サファイアを見た。サファイアはさっき以上に眼を見開き、固まっていた。

「そ、うか……………。やっと、やっと……………」

その言葉は続かなかった。

御免、パール……。お前が思い出してしまったんなら、もう……。

「此処には居られない……」

サファイアはそう呟いた。ルビは聞き間違いかと思い、聞き返した。

「え……。？　それという……。意味……。ですか？」

「其のままの意味だ。俺はもう、此処には居られない。パールが全てを思い出したんなら……」

サファイアがパールの髪を梳くと、バンツと窓が開き、強風が吹く。

「来たか……」

「——、速くッ！」

一人の男の声が聴こえた。だが、風の所為で前をまともに見れない。

「な……。に……。！？」

そして、風がおさまると、サファイアは何処にも居なかった。

「是で、良いんだよね……。？　に……」

「それ以上は言うな。よかつたんだよ。是で……。このままだと『俺』だと気づかれるな……。ダンナに言っつて、変えてもらわねえと……」

「……。他の髪色は合わないと思うんだけど……」
「黙れ」

戻る記憶？（後書き）

変な終わり方ですね。
悪しからず・・・・。

其の記憶は？

「そっか・・・、やっと、やっとパールは全てを思い出したんだね・・・。。でも、『あの時』、僕の事を覚えていなかった・・・。ずっと・・・ずっと覚えているって『言った』くせに・・・。。思い出してくれたかな・・・？　ねえ、零^{ゼロ}、壺^{イチ}・・・どうだ思う？」

「「さあー？」」

「・・・殺そうか？　君等・・・。」

「「厭でーす」」

黒髪に紫眼の黒いファー付きコートを着ている青年が零。白髪に碧眼の白いファー付きコートを着ている青年が壺。二人は同じ顔をしている、双子である。

「煤皇^{めがみ}！。チエーンソー持ってきてー」

「「止めれーッ！！」」

二人ははもらせて、叫んだ。

「サファイアが・・・居ない・・・！！？」

「はい。姫が気を失って・・・、書庫室を出てすぐに会いまして、姫の記憶がどうこうと言って、何時の間にか、消えていました・・・。。。。。」

「そ、んな・・・！！！」

パールは驚愕していた。眼を見開き、目尻には涙がたまっている。瞬きすれば、今にも零れおちそうなほどに。

せつかく、せつかく思い出したのに・・・。。ッ！！　どうして居なくなってしまうの・・・！！？

「に・・・ま・・・。。どう、して・・・？」
其の呟きは、ルビには届かなかった。

「パールを手に入れるには、パールが最も大事な存在を、盾に・・・、交換条件の道具にした方がいいかな？　だったら、ルビⅡエルフイエスがいいかな？」

「それは・・・っ！！」

「ダンナッ。パールを傷付けるのは厭だったんじゃないの！！？」
どうしてそんな事を・・・ツ！　カゲキも何とか言えッ！！」
カゲキと呼ばれた黒髪紅眼の青年はゆっくりと振り向き、言った。
「俺は彼女に会えるのであれば、手段は選ばない・・・」

「つくしよ・・・ッ！」

零は舌打ちをしたい心境に駆られた。

何よりも大事なパールをそんな風に傷付けることになるとは思っても居なかった。　壱と零は齒切りをした。

其の記憶は？（後書き）

謎の組織が・・・！（笑）

ま、謎には変わりないんですが、

パールに関係ある人物だらけですよ。

カゲキなんてもう・・・、ある青年とつながりがあるし。（ネタば
れ。でも誰とは言わないです。）

これから急展開を見せるとしますので、新章をどうぞ
よろしく！

其の記憶は？（前書き）

章管理してみました。

其の記憶は？

「煤皇ー。あれ？ 嘉皇^{かがみ}、煤皇はー？」

紫色のした髪の青年がひよつこりとある一室に顔をだした。其処には髪の短い少女が一人だけ。其の青年の目的の子は居ない。

「あれ？ 居ませんでしたか？ 僕も見えていないんですけど・・・」

「あーれー？ 何処行つたかなー？」

「旦那様は何故、煤皇に御用が？」

「あー。ちよつと、零の手伝いをしてもらおうかなー、と思つてー」

「成程。僕の方でも見つけたら旦那様が探していたことをお伝えしておきます」

「有難う。そうしておいて」

青年はそう云つて、部屋を出た。

「姫、大丈夫ですか？」

ルビは元気が無いパールに声をかけた。サファイアが消えてから早数ヶ月。パールは昼は普段通りしているが、夜はずっと泣いている。

「大丈夫よ・・・。ただ、いきなり消えたから、心配になつて・・・。大丈夫かしら・・・。？」

パールはほぼ棒読みで云つた。その言葉に力が無い。

「姫、私は此の後用事があるので、兄さんがあとは付き添いますので」

「そう・・・。。判つたわ・・・」

パールはぼうつと窓の外を見ているだけだ。そんなパールが痛々

しく思え、ルビはそうそうに部屋を出た。

やっと、やっと思い出したのに……。

愛しい日々の記憶を……、大切な記憶を思い出したのに、何故『あの人』は私の目の前から消えてしまうの——！？

——「いつか、また——」

あの言葉は嘘だったの！？

「兄様……！」

パールは力なく、崩れ落ちた。

其の記憶は？（後書き）

とことん新キャラ登場中！。

プロフはまともり次第書き足したいと思います。

頑張ろう、自分・・・。

其の記憶は？（前書き）

メリークリスマス！
リア充の日・・・。

其の記憶は？

其処は暗く、昼間か夜間かは判らない。何時も淡く輝く蠟燭ろうそくが灯っている。

青年は物想いに耽ふけっていた。思い出すのは、懐かしい姿と声。

——「私が、ずっと、貴方の傍に居てあげる。貴方の悲しみを癒してあげる……」

あの日から、何年経ったんだろう？ 自分は何時まであの言葉を馬鹿正直に信じているのだろうか……？

だけど、信じていたい。

信じていないと、自分の存在意義を見いだせないんだ……。

「……何か、もうひとつ忘れている様な……」

「？ 姫、どうかされましたか？」

ルビは呆けているパールが心配になり、声をかける。パールは気づいたように、ルビを一瞥し、顔を横に振った。

「何でも無いわ………ただ……」

「……『ただ』………？」

何かが、自分の大切なものを奪っていく様な・・・、厭な感じがする――。

パールは自分の腕で自分を抱きしめた。

「あ、ルビさん。済みません、是姫に渡していただきたいんですが・・・。」

「ん？ 何？」

いかにも怪しい包み紙で、包装されたものだ。ルビはそれを見て、息を飲んだ。

「い、今すぐ捨てるべきだわ・・・。」

「私も、そう思ったのですが、姫宛てですし・・・。本人に渡してからがよろしいかと思いついて・・・。」

「・・・兄さんに相談しよう・・・。」

「そうしましょう・・・。」

「今すぐ捨てる」

「「即答っ!!?」」

ツキアはそれを物凄い形相で二度見した後、数秒で結論を出した。といつても、「捨てる」の一言だが。

「でも、勝手に捨てたらあれだし・・・。」

「じゃ、ルビが同伴して開ければいい」

「「成程っ!」」

「・・・馬鹿」

ツキアは溜息を吐いた。

「い、今すぐ捨ててえ————！！」
「・・・何も其処まで・・・」
パールは物凄い勢いで後ずさった。

其の記憶は？（後書き）

何時もの日常の戻りつつある、パール・・・。
だけど、それでも、悲劇は襲ってくる・・・。

ただ、守りたかった？（前書き）

ただ、守りたかった？

傍に居ると、云った。

ずっと、何時までも、傍に居ると――。

なら、それを叶えてもらおうじゃないか――！

「じゃ、壱はルビ」エルフィエスを捕えてきて。其の子を洗脳する準備は零と煤皇がやってくれたから……」

「……まだ、納得した訳じゃ、ない……。僕は……！」
壱は叫ぼうとした、だけど、最後までは云えなかった。云わせてもらえなかった。

「黙れ。つべこべ云わずに、さっさとやってこい……。っ！！」
「……。っ！……。っ……。っ……。っ……。っ……。っ……」

唸るように云い、其のまま踵を返し、部屋から出て行った。

「……。？ 何か、厭な予感が……。……。何だろう？」

パールは人知れず、身を震わせた。

ルビは厨房で、パールに食べさせるパウンドケーキを作っていた。パールはビターチョコが好きで、チョコなどの種類だと、甘いのは苦手である。

「ん、こんなもんかしら？ さて、流し込みますか・・・」
かき混ぜていたスポンジの元を型へ流し込む。ゆっくりと、入れていく。

「さて、オープンは、っと・・・」

パールの喜ぶ顔がすぐに思い浮かぶ。物凄く喜んでくれそうだ。

カタン・・・。

「誰っ！？・・・ッ、魔王、様・・・？」

目の前に居るのは、髪の色が少し違うが、寸分違わぬ、サファ
イアの顔。

「魔王・・・、ね。兄さんはそんな役職だったっけ・・・？」

男はそう呟いた。声はサファイアのものより、少し高めの声。今
気づけば、瞳の色も違った。サファイアは其の名の通り、碧色だっ
た。目の前に居る青年は紫色だ。

「パールには悪いけど・・・、これも、パールの為だと思えば・・・
・・・」

「ッ！？ 貴方、姫に何か用なの！！？」

「ま、用は君にあるんだけどね・・・。悪く思わないでね？」
青年はそう云って、ルビの顔の前に手を翳した。

「『眠れ、今、この『刻』は――』」

云い終わると同時に、ルビの膝がかくんと、となり、前のめりに
倒れかけた。青年はルビを不本意ながらも、抱きかかえた。

「姫ダッコなら、パールにやりたかった・・・」

と、其の時。

「ルビー。お腹すいたー・・・。って！」

其処にパールが来た。

「やっぱ！」

青年は慌てて、窓の外へ出ようとするが、パールに止められた。

「何をするおつもりですか!? ルビを下ろして下さい、『兄様』ッ!」

兄様と呼ばれた青年は踏み止まった。其のまま振り返り、パールと対峙した。

「何を……、ルビを何処にお連れするつもりですか……、壱兄様……」

パールは今にも泣きそうな顔で壱を見た。対する壱は堪え切れずに、視線を反らした。

「御免、御免ね……。こうするしか、無いんだよ……。僕には、彼に逆らう術^{すべ}が無いんだ……」

「そんな……。ッ。彼って? 彼って誰ですか!」

「それは、云えない……。何時か、迎えに来るから……。それまで、待っていて。パール、僕の愛しい妹……」

壱は消えるように、其の部屋から去った。

「兄、様……!」

パールは、さっきまでルビが居た厨房でただ、ただ立ち尽くしていた――。

ただ、守りたかった？（後書き）

大切な、存在。

それを失う日が来るなんて、思っても居なかった――。

ただ、守りたかった？

ルビが、消えた。

連れ去られた……。

「どういことですか！？ 何故、ルビは連れ去られたんですか……！？」

「判らない……、判らないのよ……！ 何故、あの人はルビを連れ去ったのか……。判らない……。……！」

ツキアはどうしようもなく、立ち尽くした。大事な妹が攫われた。しかも、パールの目の前で。

「どして……。？ 私を傷付けることは嫌いだと……。云つていたのに……。！ 何故こんな事を……。！？」

「……。？ 姫は、ルビを連れ去った人を知っているのですか……。？」

ピクツと、一瞬、パールの動きが止まった。それをツキアは見逃さなかった。

「知っているんですね……。！？ 誰ですかッ、ルビを連れ去ったのは……。っ！」

肩をつかみ、ぐらぐらと揺らす。パールは堪え切れなくなり、口を開いた。

「連れ去ったのは……。ルビを連れ去ったのは、私の……。……私の実の兄……。、壱兄様なの……。」

パールの告げた言葉に、ツキアは眼を見開いた。

「あ……。に……。……？ 姫の、兄……。？」

「ええ、私の兄が・・・、ルビを連れ去ったの・・・・・・・・」

数年前、生き別れた兄・・・・・・・・。

王族としての、資格を剥奪^{はくたつ}され、魔の刻印を刻まれた
|。

パールの兄の『二人』居るうちの一人がきだ――。

「こんなこと、するなんて・・・。思いもよらなかった・・・！」

あの言葉は、嘘・・・だったんですね、壱兄様、零兄様・・・・・・・・
・！

「御免ね、パール・・・・・・・・」

ただ、守りたかった？（後書き）

自分を、赦してなんて、云わない――。

云えない――。

ただ、守りたかった？

「いい子だね、壱。流石だ……」

男は云う。だが、壱は褒められても嬉しくなかった。

「ダンナー、準備整ったよー」

「あ、有難う、煤皇。さ、其の子を運んで、壱……」

「……判りました……」

黒いに近しい色の髪。其の髪がさらりと落ちる。壱はルビを抱き上げ、男の後を歩き出した。

「零、其の子を中に入れて」

「……はい」

「間が長いよ、零」

云われた通りに、ルビをカプセルの様なベッドに寝かせた。

「じゃ、初めよつか……」

零は小声で、寝ているルビに向かって何かを呟いた。

御免、と……。

「さて、パール嬢は未だに寝ているのか？」

「当たり前よ……。大切な子が自分の実の兄に連れ去られたんだから……」

屍とルージュが云う。ノワールとシャインはただ黙っていた。

「大切、ね……。そういや、ノワール、アクアの恋人って誰だっけ？」

「前に教えた覚えがあるんだけど……。姫の母君、サクラ様だよ」

「……不倫か？」

「違う。まだ其の時はサクラ様は結婚してなかった」

ノワールは呆れながら云った。アクアとサクラが別れ、サクラが結婚した後、アクアは記憶をなくし、閉じこもり、屍に戻った、と。
「ふーん……。」

実感が、無い。覚えて、いない。

「姫、お身体の方は大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫。さつきよりは楽になった……。心配かけて御免なさい、ツキア……。」

浅く、笑う。ツキアを心配させまいと。だが、ツキアにとって、其の笑顔は逆に心を痛めるものだった。

「無理に、笑おうと……しないで下さい。つらいので、あれば……泣いてよろしいですよ……？」

パールは眼を見開き、何か吹っ切れたように、泣きだした。嗚咽を堪えながらも、今まで以上に、泣いた。ツキアは優しくパールを抱き、少し、泣いた。

守りきれんだろうか？

ルビを、大切な……愛しい、姫を――。

守れるのだろうか、自分は――。

鏡映し？

其の、二人は鏡映しの様に似ていた。

だけど、二人は気付かない。

自分等が双子だと――。

「姫、ルビは……、ルビが連れ去られたって本当ですか！？　っ
あ……ツキア……」

「何故、お前が此処に居る……？」

ツキアは自分の母、月^{ゆえ}エルフィエスを睨んだ。

「……ツキア？　どうしたの……」

急にツキアの様子が変わった。パールは少し怖いと思った。

「その、当たり前でしょ……？　娘が連れ去られたんですから……」

「だが、俺の前に二度と現れるなと云った！」

「そう、だけど……」

徐々にツキアの剣幕は鋭くなるばかり。明らかにツキアの様子が変だ。パールは心配になってきた。

「どうしたのよ、ツキア！　どうして、自分のお母様にそんな態度をとるの！？」

「当たり前です！　こいつは自分の子供を捨てたんですよ！！」

「え．．．．．？」

パールは眼を見開いた。そして、月を見た。月は顔を歪め、俯いていた。

「捨て、た．．．．．？」

パールは齒切りをした。

「貴女．．．は．．．．．何てことを．．．．．！」

「しょうが、なかったんです．．．！ あの子は、茶髪だったから．．．．．」

「だからと云つて、何故捨てた！」

パールはもう、敬語で話すことを止めた。

「茶髪だからと云つて、己の子を捨てる理由には、ならない！ ちゃんと説明をなさい！」

そう叫んだ。月は意を決し、口を開いた。

「エルフィエス家は、代々ミカエリス家に仕えてきました。長男と長女は生後5カ月で、城に行つて、英才教育を受けます．．．。だけど、其の子は茶髪で、王家に仕える者には相応しくありませんでした．．．．．」

一つ一つ、言葉を紡ぐ。パールは耳を傾け、手を握り締めた。

「最初は、私も大切に育てました．．．。ですが、城の者から陰口をたたかれ、気が気では無くなつて．．．．．」

眼を閉じ、言葉を止める。爪が食い込む程に手を握り、月は続ける。

「一度、殺しかけたのです．．．．．」

「．．．！？ そんな．．．ッ！！」

パールは絶句する。ツキアも切れ長の瞳をもっと細めた。

「これ以上、此の子は私の傍に居ない方がいい、と思い．．．其の

子を捨てました……」

これはツキアも知らなかった様で、片手で口を覆った。

「それで……其の子は、何処に……」
パールは聞く。

捨てられた其の子は今、其処に居るのだろうか？ そう思い。

「居ますよ。此の城に……」

ツキアが答えた。それは、予想外の答えだった。

「え……？ 居る、の……」

「ええ。居ます……。姫もお逢いしていますよ……」
誰だ？ もう、逢っている？

「ついでに、其の子はルビの双子に妹です」

眼を見開く。それなら一人、心当たりが居る。

「……宝……」

鏡映し？

似ては、いた。

双子だと思うほど、酷似^{こくじ}していたから。

だが、本当に双子だとは、思っていなかった――。

「宝、なの………？」

パールは真っ直ぐにツキアを見る。ツキアは口を開け、真実を語る。

「ええ、宝です……。ただ、顔がルビに似ているからと云う訳だけで、宝が妹と云ってる訳じゃありませんからね。ちゃんと根拠があつて、云っていますから」

ツキアの云ったことにパールは齒噛みする。

本当に双子だなんて、思わなかった……！

「俺は彼女が捨てられる前に、もう何度も顔を見えています。城で逢った時、名前を呼びました。ですが、反応してくれなかった……。だから、記憶を消されているんだと、思いました……。…」
「記憶まで……。！？」

ツキアが真実を語っていくと、月の顔はだんだん頂垂れて行った。パールはそれが図星だと思い、月を睨む。

「彼女の本名は、『赤月夜』^{あかつきよ}に生まれたので、ルナ」

ルビが赤、宝・・・、ルナが月。

「ルナ・・・・・・・・ルナ」エルフィエス・・・・？」
「そうです」

目を細め、答える。月はもう顔を両手で覆っていた。ルナが生きているとは思っていなかったらしい。

「・・・・・・・・・・月」エルフィエス・・・・」

「はい、我主」^{マイロード}

「貴女を追放する」

「・・・・・・・・つ!？」

パールは諸手^{もろて}を広げ、月に向かって云う。その言葉に月は絶句する。ツキアも少し眼を見開いた。

「己がしたことを後悔するといー!」
パールがそう怒鳴ると同時に、月は拘束^{こうそく}された。

「さよなら、月・・・・・・・・」

月は砂の様に消えて行った。

「姫・・・・・・・・泣いて、いらっしゃるんですか・・・・？」

ツキアは優しくパールに聞いた。パールは肩を揺らせ、無言を貫いた。

「ん．．．．．ごめ、ん．．．．．」

数分経った後、パールはやっとの事で口を開いた。

「いいえ、貴女が謝る必要など、有りません．．．．．」

それから、パールはツキアの腕の中で泣き続けた。

鏡映し？（後書き）

ザ・シリウス。
シリウス道まっしぐら！
私って・・・。

二人の思いは？

こんな風にしか、君を守れない僕等を赦して欲しい――

「煤皇、これまた可愛い服を着てるね……」

壱はセーラー服の様な服を着ている、仏頂面の青年に声をかけた。

「ダンナが、着てくれて……云うから、着た」

「見上げた忠誠心だよな……」

「だよね……」

零の言葉に頷く壱。其の二人に煤皇は怒鳴る。

「忠誠とか、これ関係無いだろ――！」

「「ある（だろ・よ）」」

「死んでしまえ――ッ――！」

煤皇は叫びながら部屋を出た。

「ねえ、兄さん……。ルビは、起きたの？」

壱が問う。零は壱を一瞥し、答える。

「まだだ。記憶を消すのは……簡単じゃないからな……」

「そっか……」

そついい、二人は背中合わせに窓際に座る。

「幾ら、パールの為だと云っても……。罪悪感がわくな――」

「それは俺も一緒。ルビを巻きこんでしまったからな……」

淡く笑いながら話し合う。

「城に、居た頃だったら、こんな風に……話せなかったよね……」

壱が唐突に云う。零は静かに眼を見開き、答えた。

「・・・だ、な・・・。。パールが居たからこそ、俺達の今があるんだよな・・・。」

あの時、パールが助けてくれなかったら、俺達は『あいつ』に売られていた。見捨てられていた。

二人は同時に眼を閉じ、開ける。其の同じ行動に、二人は笑う。

今度は、三人で・・・パールと共に笑い合いたい――
――。

二人の思いは？

もし、叶うのであれば――。

「零、壱。ルビが起きた。様子見に行つて来て」

「「……………はい……………」」

「返事遅いつて」

零と壱は渋々返事をし、地下へ行く。

「……………わーお、起きてる……………」

「だな。壱、服持つてこい。あれ、濡れてるから……………」

「ああ、透けてるね」

「堂々と云うな」

壱に裏拳うらけんをかました。壱は仕返しに回し蹴りをかまし、服に取りに行った。

「はい、兄さん、持ってきた。そして、裏拳は痛かった」

「おう、有難う、弟。そして、俺も回し蹴りは痛かった」

零は起きているが焦点のあっていない、ルビの前に行く。が、眼をやりどころに迷った。

「ほら、兄さん。赤面してないで、さっさとやる」

壱はそんな零をにやにやしながら見ていた。零は赤面しながら壱を睨んだ。

「お前……………ッ。だったらお前がやれよ……………！」

「厭だ。僕はパール以外の女の子に触れるのはもう御免」

「此のシスコンがッ」

「兄さんもね」

零は余り正面を見ない様に、ルビの服を脱がしていく。

「わー、ルビって肌白いね。磁器みたいだ。さわり心地どう？」

「聞くな、変態ッ！」

「この発言にもっと赤面している兄さんに云われたくない」

其の二人を、ルビは光の宿していない瞳で見た。

「黒に近い藍色。僕はパールの銀に染めたいな」

「それは俺も同感。こいつはきつと銀が似合う」

そう云って、二人はゆっくりルビの髪を弄っていく。少しずつ染めて行き、銀にする。

「うん、紅色の瞳に銀の髪はよく映える。パール程じゃないけど、可愛い」

「だな、俺も顔はパールの方が……いや、全てパールの方が好きだな」

零は顔を引き攣らせる。云っている途中で舌が睨んできたのだ。云い終わると舌はにっこりと笑った。

純血と混血？

これ程、月が流れるのを、恐れた事は無かった。

今は、あの子が居ない『刻』が、流れるのが恐ろしい。

怖い、と感じてしまう。

もう大切な人が居なくなるのは、厭だ。

「あ、さ．．．．．？ 起きなきゃ．．．．．」

パールは頭を抱えながら起きる。頭痛が酷くて、まとも起きれる気がしなかったが、起きなければ、他の者が心配する。

——「姫、お早うございます！」

「．．．ッ！！——．．．．．ッ」

そんな声が、聞こえた。だけど、其の声の主は、此処には居ない。パールは手で口を塞ぎ、嗚咽をこらえたが、泣くことだけは止められなかった。

コンコン

「ッ！？ ちょっと、ちょっと待って！ 今開けるからッ！」

涙を手の甲で拭き、パールは扉を開く。其処にはツキアが居た。

「ツキア、お早う……。朝餉、もう出来たの？」

「……………」

返答が、無い。

「？ ツキア……。どうした……………ッ!!?」

首筋に鈍い痛みが走る。

じゅる……………

「ッ、キア……。ッ!!」

吸血衝動ッ!? もう、そんなにも飢えて……………!

「ツキア、止めてえ……………!」

そう叫ぶ。すると、ツキアがパールから離れる。ツキアの口元から喉にかけて、血が付いていた。其の血は、パールのものだ。

「ツキア……………」

「旨い、な……………。もつと……………」

ツキアはもう云い、口を近づける。パールは驚き、手で制す。

「止めて、ツキアッ! これ以上は、駄目よ!!」

そう叫ぶと、ツキアがゆっくり顔を上げた。其の顔は不満そうだった。

「……………駄目、か……………?」

実に子供の様な顔だった。其の顔に一瞬、う、となるが、それでも云い募る。

「駄目よ。幾ら純血種わたしでも、吸われれば……………!」

吸われれば、飢える。

「知ってる。だけど、お前の血は……………甘くて、美味しい……………」

「……だから、欲しいんだよ」

そう云って、吸った場所を舐める。

「ん……！」

「お前、感度がいいな」

ツキアはにやりと笑う。

違う、此の人は……ツキアじゃ、ない……！！

その証拠に、瞳が紅色。髪の毛先の方も少し黒かった。

「貴方、誰……？ ツキアじゃない……！！」

「あれ？ 気付いた？ だけど、此の身体はツキアのモノ。今、ツキアは中で眠ってる」

と、悪辣に笑い、云うツキア。パールは頬を紅潮させながら、云った。

「じゃ、あ……貴方は……誰、なの……」

「俺？ 俺は……」

身体ごと離し、パールと対峙する。

「俺はカゲキ。覚えておいて、俺の愛しい姫……」

最後に青年は笑い、倒れた。

「ッ！！ ツキア！！ ツキア、大丈夫！？」

ツキアの髪の毛は何時も通りの金髪に戻っていた。

パールはツキアに声を掛けるが、返答がない。口元に手をやる。呼吸はしている。

「気を、失ってる……だけ？ ツキア……、カゲキって誰、なの……？」

少し不安になった。あれは、一体誰なのか。何故ツキアの身体を乗っ取ったのか。

「ツキア・・・・・・・・」

吸血鬼にしては、珍しい金髪。

其の金髪は、貴方に不幸をもたらすの――？

月明かりの影

『月明かりの影』

フザケた言葉だ。

「あいつが、『ツキアカリ』、俺が――」

――『カゲ』

「カゲキ、君僕に断り無く、僕のパールに血を吸ったでしょ？ 駄目、じゃないか……」

薄い紫色の髪の男が、云う。カゲキは其の男を一瞥し、ぼそつと、呟いた。

「……済みません……」

其の呟きを聞くと、男はクスリと笑って、

「いい子だ。流石僕のカゲキ……。これからは勝手にパールの血を飲んじゃ、駄目だからね？」

「ハイ」

短くそう答える。男は気を良くした様に、鼻歌交じりに部屋から出て行った。

男が出て行ったあと、カゲキは寝がえりをうった。眼を閉じ、一人の少女を思い出す。

銀の髪と碧色と紫色の瞳。

あいつから通して見た姿。

愛おしい、と思った。

そして、逢いたいと、自分のモノにしたいと、思った。

だけど、

——「残念。彼女は僕のモノ。そして、ツキアのモノでもある。一生、君は彼女に触れることは——」

出来ないんだよ——。

「夢物語、か……」

そう、云われた。

——「まあ、君が、代償を払うと、云うなら、逢わせてあげるよ?」

「その、代償が……」

カゲキは顔を赤くさせ、片手で眼を覆った。

「厭な事、思い出した……」

そう、呟くと、声が聞こえた。

「厭な事って、僕との『アレ』の事？」

「ブツツツ!!」

其の声の主は、さっきの男だった。

「ザクロ……、お前、何時から……」

「ん？」「其の代償が」のそこから！」

「……」

カゲキは半眼になった。ザクロは面白うそうに、笑いながら、云った。

「カゲキにとつて、『アレ』は初めてだったもんね！僕は何度か経験してるけど……」

「年が違うから、経験値が違うのは当たり前！」

「そうだね。でも、カゲキとするのが、一番楽しかったな……」

「口に出して、云うなよツ！誰かに聞かれたらどうするんだよ！……」

「だいじょーぶ、話してても、誰も判らないよ」

ザクロは楽しそうに云う。もう相手にしてられん、と云うようにカゲキはソファから下り、部屋の外へ出る。

「カゲキ、君には、パールはあげないよ……。君も、パールも皆……」

僕のモノ――。

ザク口は悪辣に笑った。

純血と混血？

何時、打ち明けるか？

もし、此のまま、打ち明けずにいたら．．．．．？

——「宝^{あのこ}はそれを知っているの——ツ！？」

「ツキアッ！！」

「——ツ！？」

パールの叫びにも似た声でツキアは眼が覚めた。

「．．．ひ、め．．．．．？ あれ、何で、俺．．．．．」

「よか、った．．．．．。起きて、くれた．．．」

パールの顔は今にも泣きそうだった。

ツキアは眼を見開く。

口の中に、何時も感じるはずのない味がする。

少し、上を向けば、愛する姫^{パール}の首筋に牙の跡がある。

「あっ．．．、ひ、め．．．．．？ ま、さか．．．．．俺．．．
．．．」

パールはふるふると首を横に振る。

「大丈夫、吸血衝動は、仕方のない．．．事、だから．．．．．」

「そんな．．．、混血は、純血の．．．血を望んでは、いけない．．
．．．．。なのに、俺は．．．．．」

混血が純血の比類なき血を、求むことは、最大の禁忌^{きんき}。

「それに、あれはツキア^{貴方}じゃ無かった・・・」

パールの云った事がよく判らないと云う様に怪訝な顔をした。

「それは、どう云う意味・・・ですか・・・？」

ツキアは聞き返したが、パールは淡く笑うだけで、答えない。答えようと、しない。

カゲキ、貴方は一体誰なの？

どうして、私を知っているの？

どうして――。

純血と混血？（後書き）

一つ話をはさんでしまい、ちょっと読みづらいかもしれません。
悪しからず。

誤字脱字があれば、云って下さい。

ルナⅡエルフィエス

風に揺れる茶色を見つけた。

「ツ、宝……！」

ツキアは咄嗟に呼び止める。呼ばれた宝は振り向き、此方に歩いてきた。

「どうしたんです、ツキアさん……。姫の事、ですか？」
パールの事かと、宝は一瞬顔を暗くさせる。ツキアは少し動揺しながら首を横に振った。

「違う……。姫の、事じゃ……。無い……。」「
それに宝はほつと安堵の溜息を洩らす。

「え、と……。それじゃ、どうしたんです？」
ツキアは俯く。

ルビ……。。

其の顔を見れば、厭でも妹の顔を思い出す。こんな、つらそうな顔を、他の者には見せない。

「？ ツキアさん……。？」

宝は顔を歪め、ツキアの頬に触れる。ツキアはビクツと反応したが、其のまま宝の手首を掴む。

「た、から……。話たい……。事がある。聞いてくれるか？」

「……。？ はい、私でよければ……。」

少し困惑しながらも、宝は頷く。ツキアは宝の手を引き、誰も居ない所へ連れて行った。

パタン、と扉を閉め、念のため施錠せじょうしておく。

「それで、話と、云うのは……………」

「ふー、落ち着け、落ち着け！ 自分落ち着けえッ！！ 大丈夫だ、大丈夫！！」

「……………」

宝は軽蔑けいべつするようにツキアを見つめた。ツキアは咳払いし、真摯しんしに宝を見つめた。

「宝……………否、“ルナ”……………今、此处で、真実ほんとうの事を云う」

宝は知らない名前で呼ばれ、戸惑う。

「お前は、“宝”クロードイ”と云う名前じゃ無い。お前は……………お前の本当の名は……………」

徐々に宝の眼が見開かれる。

「ルナ”エルフィエス。俺の妹、そして、ルビの双子の妹だ——」

宝は一筋、涙を零した。

未遂

事實は、隠さず話した。隠したって、もう、無駄だと判断した。

「それは、事實……ですか？ ツキアさん……」

「当たり前だ。嘘を云って……知ってどうする。俺が今話したのは、事實だ」

ツキアはそう云い、真摯に宝、もといルナを見つめる。その澄んだ碧色の瞳を見つめているのが耐えれなくなったのか、ルナはツキアから眼を反らす。

「では、何故……私は捨てられたのですか？ まさか、茶髪、だからと云うんですか？」

自虐的に、ルナは云う。其の痛々しい顔を見たツキアは顔を歪めた。

「……あいつは……俺達の母親は、弱い女だった……王族（じやうく）からの圧力に耐え切れなくなって、お前を捨てた。だから、俺はあいつが嫌いになった」

それが、ツキアの女嫌いの理由。偏見にも、似た意見だ。だが、ツキアにとっては立派な意見で、理屈だった。

「其の……私が妹（このこ）と云う事は、ルビさんは、知ってるんですか……？」

其の質問に、ツキアは首を横に振る。

「エルフィエス家（俺の家）は代々、ミカエリス家（王族）に仕えてきた。長男長女は生まれてすぐに此処（城）に来る。だから、ルビはお前の事は知らない」云い終わると、ルナは「そうですか……」と云い、俯いた。

其処には、静寂が流れた。

「・・・夢を・・・」
ポツリと、ルナが話し始める。

「夢を、見ていました。何時か、本当の家族が私を迎えに来てくれるって。迎えに来てくれるなら、捨てた理由だって聴こうなんて、思わなかった。だけど・・・」

ルナは顔を上げる。紫色の瞳は涙で濡れている。

「こんな、こんなことなら・・・あの時、死んでおけばよかった・・・！！　こんな、そんな理由で捨てられるぐらいなら、生まれてこなきゃよかった！！」

苦しそうに、胸に両手を重ねながら、そう云った。

「何故・・・茶髪だからと理由で愛情を奪われなくちゃ、いけないの・・・？　どうして。どう、して・・・」

「俺はな・・・反対した」
其の言葉に、ルナは勢いよく顔を上げる。ツキアの顔は、先程のルナの様に自虐的だった。

「反対、したんだ・・・。だけど、あいつは、俺を騙してまで、お前を捨てた。俺は、それが・・・赦せなかった」

自分から大切な存在を奪った。

「あいつは、俺が反対した時、判った、と云った。だけど、数週間後、家に行ったら、お前が居なかった・・・」

一つ、一つ思い出して語る。

それは、忘れなくても、忘れれない、悲しい過去。

「だから、俺は、あいつを……………」

ゆっくりと、ツキアは自分の手を見つめる。

「殺そうと、した……………」

ルナは絶句した。

未遂（後書き）

其の言葉は、事実？

信じて、いいの——？

私に、家族が居ると云う事を——。

ただ、それだけ

頭が真っ白になっていた。

気が付いたら、目の前には――

母親が倒れていた。

目を開け、ツキアはルナを見る。其の眼は、驚愕きょうがくを抑えきれずに、見開いていた。

「あの、時は……自我を失くしていた。俺も、吃驚した……」

悪辣わら且つ、自虐的にツキアは晒さらう。

「其の後、すぐにあいつは眼を覚まし、「ゴメンナサイ」と……云い続けていた……」

――「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ」

其の時の、母の背中が、酷く弱く震えていた事を思い出す。

両手が、震える。

「自分でも、愚かな事をしたと……思ってる。だけど、其の時はそれしか考えなかった……」

右手で左手首を掴む。

「俺は、あいつの首を絞めた後、自己嫌悪に陥って……」

分で自分の手首を切った」

さらにルナの瞳は見開く。ツキアは「だけど」と続ける。

「あいつがもつと半狂乱になって、俺の手首の傷を治した。あいつは治癒能力に長けていたからな………」

だから、自分の手首には傷跡一つ残っていない。

「こんな風に憎んでいても、やっぱりあいつは母親何だな、と……
……痛切に思った」

どれだけ

傷付けても

蔑^{さげす}んでも

恨んでも

憎んでも

侮^ぶ蔑^{べつ}の眼差しで見ようとも

月^{コエ}は此の手を離そうとしなかった。

「俺は……憎んでいても、自分のやったことが、正しいと思っていなかった………」

ただ、母親を苦しませただけだった。

「それでも、俺は・・・お前を取り返したかった・・・」

取り返せた、存在

なのに、また失った――。

泡沫

黒色の、柔らかい髪。

傍にいた時は、何時もそれを撫でていた。

撫でれば、くすぐったそうに、顔を緩めて、微笑んでいた。

綺麗な紅色の瞳。

とても、可愛かった。

それを、護りきれなかった……………。

「俺は……護りきれなかった……………。お前も、ルビも……
……」

大切な存在を、失くすのはもう二度と厭なのに、また……失く
してしまった……………。

ツキアは、眼を伏せる。

「お前が俺を忘れていても、傍に居て……ルビも居て……………
幸せだと、云えた……………。なのに」

なのに

それは、脆くも崩れた。

また、戻るのだろうか

あの頃に

泡沫^{うたかた}の一時に――。

独り

「そういえば……ツキアは……何処行ったんだろ……」

廊下を歩きつつ、首を横に振り、確認していく。

よくよく見れば、城の廊下は広く、長い。

背筋が、ぞくつとした。

「何だろ……」

広い、場所が怖いと感じる。

広い場所に独りで居ると、怖いと感じる。

「ツキア……」

訳が判らず、ただ廊下を走りだした。

「兄さん……」

「頼むから……」

ツキアが、一つ一つ確かに進む。其の瞳は、悲しみの色をたたえている。

「俺から……離れないでくれ……!」

手を伸ばし、ルナを抱きしめる。抱きしめるその腕は、震えてい

る。

「兄さ、ん・・・・・・・・」

この、広い背中が、弱弱しく見える。

抱きしめ返せば、其の倍の力で抱きしめられる。

「ルナ、ルナ・・・・・・・・!!」
名を呼ぶ声も、震えている。

この人を、一人にしない・・・・・・・・。

もう、独りには、させない——。

其処にあるのは、闇

崩壊した。何が、とは思いだせない。

ただ、其処から

自分の大切な存在が消えていた。

目の前には、倒れている人々。

——「あ……れ………?」

何処を探しても、居ない。

走っても、走っても、

暗闇からは抜け出せなかった。

——「僕からは、逃げれないよ。パール」

その声が、近付いてきた。其処で、目の前は闇に覆われた。

厭な記憶。

それが頭から離れず、パールはただ走った。

「は、はあ………! こな、い……で………!」

——来ないで、来ないで。

忘れてしまった。記憶。それには、まだ続きがある。
それは判っている、だけど、それが思い出せない。

——「僕が・・・判らないの？ パール・・・・・・・・」

悲しそうな声。それは、聴いたことがあった。
だけど、それが思い出せない。

「来ない、で・・・・・・・・！ ザ、クロ・・・・・・・・！」

私を赦して、ザクロ。

「僕からは、逃げれないんだよ、パール・・・・・・・・」
鮮やかな紫色の髪が夜風に揺れる。

——「忘れないわ、だって私は貴方を愛してるんだから」

それを、覆さないでくれたなら、
「あれを、実行しなかったのに・・・・・・・・」

——「貴方は、だあれ？ なんで此処に居るの？」

それは、幼いパールと青年の記憶。

パール「ミカエリス？」

「私は、きっと病気ですぐに死んでしまう。だけど、“転生の術”をするから、貴方を一人にしないわ」

「本当？ 本当に僕のモノになってくれるの!？」

紫電色の髪が風に揺れる。

其の者のはザクロ「カミスリート。そして、ザクロの前に居るのは、

パール「ミカエリス

「パール、それより、身体・・・大丈夫？ 病気、悪化してるんでしよう・・・?」

心配そうにザクロがパールの顔をのぞく。パールは薄く笑い、ザクロの頭を撫でる。

「大丈夫よ。こんなの、貴方の痛みに比べたら・・・・・・・・つ、ごほつ、ごほつ・・・・・・・・」

「パール・・・・・・・・!？」

咳き込むパールの背中をさすり、ザクロは顔を歪める。

——僕が、パールを護りきれたら・・・こんな想いはさせないのに・・・・・・・・!!

ザクロはもう片方の手で拳をつくる。

——パール・・・・・・・・。。。

綺麗な銀髪と碧と紫のオッドアイ。オッドアイだけでも珍しいの

に、この美貌だ。放っておく男など、居ないだろう。

時折、迫ってくる男が居る、とパールが零していた事もあったな。そう思いだすザクロ。

——僕がパールをちゃんと護れる大人になれたらいいのに……。

「御免ね、ザクロ……………。少し寒くなってきたから、そろそろ屋敷に帰るわ……………」

「うっん、大丈夫。また、今度、ね……………」

そして、その今度はやってこなかった——。

——あれから、15年……………。長女が生まれたって、噂を聞いたけど……………。ホントかな？

ザクロは誰にもばれないように塀を超える。

高い塔を目指して歩く。目指している理由は適当に目立っていたからだ。

一気に跳躍し、塔の窓に着地する。

「あ……………」

視界を覆うのは、銀色。

「パール……………」

生まれていた。転生していた。

——「私が、貴方のモノになってあげる」

笑って、僕の名前を呼んで——。

「……？ 何で、私の名前を知っているの？」

「——」

ザクロは瞠目する。

——今、何て云った……？

「貴方は、だあれ？ どうして、此処に居るの………？」

——「貴方の事は絶対に忘れない……絶対によ」

そう、云ったじゃないか。

そう、云ったのに——

「僕を………」

ザクロは、叫んだ。

「僕を裏切ったなつ、パール」ミカエリス——ッ！——」

すべてが、壊れた。

パール「ミカエリス？」

ザクロは力を暴走させた。だが、パールもそれに便乗してしまい、魔界一の魔力を覚醒させた。

「此処には……！ 私の大切な人が居るの！ 絶対に、襲わせないっ！」

「他の者などに興味など無いっ！ 貴様は僕が殺すっ！」

——僕を裏切った。それは、赦してはならないっ！

パールは自然とノワールの鎌を召喚させ、それを振りまわした。ザクロは双剣を出し、それで戦闘に応じる。

——パール……！ どうして、君は………！！

ザクロは涙眼になりながら、パールを襲いかかる。まだ小柄な体躯なのに、パールは鎌を振りまわす。それも、正確に、ザクロへ狙いを定めながら。

——ノワールの鎌は重くて、持つことすら常人では出来ないと聞いたのに………！！

流石、魔界一の魔力を誇ったパールの生まれ変わり。

見れば見るほど、パールにそっくりだ。あの、初めて会った時の瞳と、同じだ。

——僕を警戒していた。あの時は………。

ザクロの得物が、少しパールの髪を斬る。それでも、パールは気にすることなく斬りかかる。

「どうして、貴方は私を襲うのっ!？」

「君が僕を裏切ったからだっ!」

ザクロはパールを窓際まで追いこみ、そして――。

「え・・・？」

ぐらり、と視界が揺れた。そして、勢いよく落ちていく感じがした。

「っ、パールッ――!？」

ザクロは手を伸ばしたが、それは届かなかった。

「パ、ール・・・・・・・・・・、パールッ――!！」

今度は、自分の手で彼女を失った――。

パール「ミカエリス? (後書き)

殺したかった訳じゃない。

本当は――。

パール「ミカエリス？」

風の音が聞こえる。正しくは、風を切る音に近いだろうか。

パールは速度を落とすことなく、落下していたが、途中で鎌をふり、壁に突き刺した。

ガガガガッ

壁を削り、どうにか落下は止まった。

「どうにかして戻らなきゃ……………！」

「どうやって？」

声がした。近くに小窓があり、そこからザクロが顔をのぞかせている。

「よかった、生きてた……………」

「？ 何か云った!？」

パールは吠えた。ザクロはそれをものともせず、悪辣に笑った。

「別に？ 死んで無かったんだな、と」

「厭味な奴……………！」

唸るように云う。ザクロは一瞬暗い顔をしたが、すぐに飄々とした、悪辣な顔になった。

「けど、そんな事で死んじゃ駄目だよ。君は……………」

トン、と小窓から出てきたザクロはそのまま中に浮かぶ。

「僕が殺すんだから」

突如、突風が吹き荒れる。鎌はそれに耐え切れず、外れ飛ばされ

る。

「次期魔界を統べる女王の力はそんなものかい？　ヴァンパイアの長でもあるんだから、しっかりしなきゃ」

一瞬にして、パールとの間合いを詰め、蹴りを入れる。パールはそれを間一髪で避ける。

「あ、でも。君の双子のお兄さん達は？　何処行っただい？」

「どうして、それを知って……！！？」

「前世は君が双子だったのに……。。どの道、長女か……」

ぼそつと、呟く。だが、ザクロには一点の隙もない。こちらからは間合いを詰めることは不可能。

「な、に……意味の判らないこと云ってんのよ！？」

大振りで振りまわせば振りまわすほど、体力は奪われる。

「そんな我武者羅に振りまわした、って……」

ザクロが視界から消える。そして、

「当たる訳ないよ、僕の姫……」

ドウ、と後ろ首に手刀を喰らわされる。

倒れかけたパールをザクロは抱き上げた。

「……思い出すまで、待つよ。だけど、今日までの事は忘れてもらう。リセットしよう。だって、そうすれば……」

君は壊れるだろう？

契約という協力

ザクロはパールを横抱きにして、城まで行く。

「取り敢えず、今日の記憶は改ざんして……今までの記憶を消そう」

パールの額に手を翳し、ぶつぶつと呪文を唱える。

「……それじゃ、また逢おう。僕の姫……」
それを云い、額にキスをしてから、ザクロは消えた。

屋根を伝い、自分の城まで急ぐ。ふと、その途中であるモノを見つける。

「いいモノみーつけ……」

ザクロはそこ目掛けて急降下する。

「「うわっ！？」」

「やあ。君達……零^{ゼロ}ミカエリスと壱^{イチ}ミカエリス……」

二人は、パールの兄達だった。二人は何故この男が自分達の名前を知っているのか判らず、身構える。

「大丈夫、僕は君達の妹……パールの知り合いだから」

前世だけど。

「パールの……？ 本当か？」

「うん。だけど、彼女は僕を忘れてしまった。記憶を消したんだよ。だから、君達の事も覚えていない」

「「！！？」」

クスリ、と悪辣に笑い、ザクロは云う。

「どう？ 僕に協力してくれない？ そうすれば、彼女にまた逢えるから……」

「・・・・・・・・・・」

二人は考えるように、顔を見合わせる。

—— やっぱり双子なんだなー……。めっちゃシンメトリー……。
。。。

と、呑気に考えていた。

「本当に……パールに逢えるのか？」

「うん。協力してくれるからね」

ニツコリと笑うが、瞳が笑っていなかった。

「・・・・・・・・判った、協力する」

そう答えれば、ザク口を晒った。

「有難う、そう答えてくれると思ってたよ……………」

消失

——夢を、見ていた気がした。

ふ、と眼を覚ませば、訳の判らない所に寝ていた。

「此処・・・・・・・・・・、何処・・・・・・・・・・？」

パールは頭痛がするが、それを堪えて、立ちあがる。

「・・・・・・・・・・綺麗・・・・・・・・・・」

目の前に広がるのは、綺麗な街並み。夕方なのか、鮮やかな紅色に染められている。

「綺麗・・・・・・・・・・いいな、こういう所で住めるのって・・・・・・・・・・」

パールは眼を細め、その景色を堪能した。

「で、此処は何処かしら・・・・・・・・・・？」

振り返れば、巨大な城が建っている。パールは驚き、少し後ずさる。

「で、デカ・・・・・・・・・・。誰よ、こんな所で住んでる金持ちは・・・・・・・・・・」

「姫・・・・・・・・ツ！ ご無事で・・・・・・・・・・！」

声が聞こえ、其方の方へ向けば、此方に走ってくる人影が。

「姫、姫・・・・・・・・！ よかった、お怪我はないんですね・・・・・・・・」

「！ よかった！」

「・・・姫？ 私が？」

「え・・・？ 姫・・・？」

近寄って来た少女を睨むパール。少女、ルビは不思議がり、パールの頭に手を翳す。

「ちょ、何をするのよ・・・！？」

パールを無視し、ルビは眸^{ひとみ}を閉じる。

「記憶が・・・消えて、る・・・！！？」

ルビが驚愕している理由が判らず、パールは怪訝な顔をする。

「姫・・・ご自分の、お名前を、覚えていますか・・・？」

「名前？ 判らないわよ。どうして自分がこんな所で寝ていたかも、判らないのに・・・」

そう云うと、ルビはぽろぽろと涙を流し始めた。

「ちょ・・・！？ なんなのよ・・・！！」

パールはおろおろし、どうすればよいのか、判らなかった。

無事でよかった、だけど。

忘れられていた。

全てを、忘れられた――。

夕陽

無事で、よかった、はず、なのに……。

「姫…… 本当に、ご自分の事も…… 私の事忘れてしまったのですか………？」

「だから、そう云ってるじゃない……」
パールはだんだん苛々しれきて、口調も乱暴になる。ルビは涙を流し続ける。

——どうして、忘れてしまったの……！？ どうして、私の事を………！

——「ルビ……ッ」

また、そう呼んでほしかっただけなのに。無事な姿を見たかった……。

「ねえ………なんで泣いてるのよ………。居心地悪いわね………」
少し屈み、ルビの顔を覗き込む。綺麗な、紅色の瞳。まるで、先程見た夕陽の様。

「綺麗、ね………その瞳………」

「え………？」
貌をあげ、ルビはパールを見る。このときから、パールのほうが身長は高かった。

「さっき見た夕陽みたいで………凄く綺麗。全てを優しく包み込む……」

そんな優しい色……」

ふわり、と微笑えば、ルビは大きな眸をめいっぱい開き、パールを見上げた。

「貴女は……、本当に………」

——「ルビの瞳は綺麗だわ。まるで全てを優しく包み込む夕陽の様に……」

幼いパールが、ルビに云った言葉。今でも鮮明に覚えている。あのとき、嬉しくて兄に自慢した覚えがある。そして、喧嘩になった。虚しい過去でもある。

——どうして、そう的確に一番欲しい言葉をくれるのだろうか？
この女は……。この女は……。

ルビはパールを見つめ、涙眼で微笑んだ。

迎えに？

ルナはツキアから離れた。一瞬だが、パールが悲鳴を上げた様な気がした。

「姫……………」

「？ どうした、ルナ」

「何だか……怖い。姫、なんか変な感じがする……………」

ルナは貌を歪めながらツキアを見上げる。ツキアはルナを見つめ、そのあと鍵を開け、扉を開いた。

「……変な、匂いにする……………。少し、様子を見に行くか……………」
ツキアがルナを一瞥しながら確認をとる。ルナは異議なく頷く。

「……………」
静寂が支配する広い廊下。ツキアとルナは無言で其処を歩いた。

——姫の気配が、無い…………。

ツキアは齒切りをした。

——姫…………っ！

今すぐにでも走り出したい。だが、ルナをおいてはいけない。ツキアは拳を強く握りしめた。

「パールを探してるの？ それは好都合。僕も一緒に探していい？」

「……ッ！！？」

二人はバツ、と振り返る。其処には紫色の髪 of 青年が居た。
「初めまして。僕はザクロ。パールの知人だよ」

——こいつ……いつの間に近寄った………っ!?

気配など、微塵もなかった。混血のなかでも力の強いツキア。

「……っ。姫…我が女王からは、そんな事訊いたこと、有りません
が………」

「うん。だって、パールはパールでも、先代の姉だから」

「「ッ!?!?」」

——先代……サクラ様の姉君の知り合い、だと………!?

「そう、僕は恋仲だった……。そして、パールは死んだ。だけど、
生まれ変わったら、僕のモノになってくれると云ってくれた……。
なのに……」

ザクロは一瞬暗い貌をし目を伏せた。だが、すぐに悪辣に嗤い、
云った。

「僕は、パールを迎えに来たんだ。パールは僕のことを思い出した。
だから、君達に止める権利など無い………」

ブワツ、と風が吹く。腕で防ぎ、風が止んだと同時に前を向けば、
其処には。

「俺達のパールを返してもらっ………」

パールと似た様な貌が二つ。

迎えに？

ツキアは目を見開き、ルナを庇うように立っている。

「……何故、姫と……」

同じ貌なのだ。そう問う前に黒髪の青年、零^{ゼロ}が口を開いた。

「俺達はパールの兄だ。真正正銘、血がつながっている。嘘だと思
うなら、パール本人に訊け」

そう云って、零は鎌を召喚させる。白髪の青年、壱^{イチ}は双剣を召喚
させた。

——いつでも戦闘OKってことが……。

少しツキアは晒う。

「じゃ、僕はパールを見つけてくる。二人はその二人の足止めよ
ろしく。あとであの子も来るから」

「……煤皇^{メカミ}か？」

「んにゃ、“紅い宝石”」

「……そう。」

最初は零が訊き、次に壱が応える。そのやり取りが終わり、ザク
口はくつりと笑って、その場から消えた。

「ルナ。お前は今すぐ姫の処に急げ」

「あれ？ 其の子……。ね、兄さん！ 同じ貌だよッ」

「そうだな。俺達、煤皇同様双子なんだろ」

どくん

胸が鳴る。

——同じ、貌……！？ ま、さか……。

「あ？ 気付いた？ そう、ルビだよ。彼女は僕達の傍に居る。この前にパールに教えてもらわなかったっけ？ 僕達の存在を」
そういえば、とツキアは思い出す。そんな話を聞いたことがあった。

「……ルナッ！ 急げッ！！」

その叫びと同時にルナは走り出した。瞬間、壱が腕を伸ばしルナへ指をさす。

「縛^{バク}」

ピタリ、とルナの身体が動かなくなる。

「ダメだよ。パールは僕等のモノだ。パールも僕達の傍に居たいに決まってる。それにルビも居るんだから……」

彼らの手には、パールを束縛する材料がそろっている。

——大切な兄

——大切な親友

そして、

——大切な恋人

それを取るか、こちらを取るか。もし、パールがこちらを取れば、ザクロはパール^{すべて}の友人を殺す。そして、ルビと零、壱の命も危ない。ぎゅ、とツキアは拳を喰い込むほどに握る。

——姫……ッ！

無事で居ることを願う。

迎えに？

——音が、訊こえた気がした。

パールは背後を振り返る。だが、何もいない。それでも、パールはなにか酷い焦燥感を抱き、落ち着かない。ふるり、と肩を震わせる。

カタン、と音がし、すぐにパールは羽交い絞めにされる。

「見つけたよ、僕の姫君……………」

懐かしいその声に、パールは眼を見開く。

耳朵を打つその低く訊き心地のよい声。それは、もう二度と訊くことのないものだと思っていた。

ゆっくりと、首を後ろへ廻らせる。

「パール…………名前を呼んで。僕を見て……………」

慈しむように、愛おしそうにパールの髪を梳く優しい手つき。禍々しくも、優しい色をたたえている紅色の眸に鮮やかな紫色の髪。

「——ザク、口……………」

その名を唱えた後、パールの唇は塞がれた。

ぴくり、と壱と零は肩を震わせた。

「旦那……」

「ああ……パールの唇があ……」

壱は頭を抱え、唸る。その横で零もふー、と溜息をつく。

「しょうがない。パールは旦那の前世からの恋人だ。そういうこと、も……ある、さ……」

「なんだかんだ云って兄さんもショック受けてるんだね」

「当たり前だろ？ 大事な妹なんだぞ……俺達をいつから助けてくれた。大事な大事な、命のも代えがたい、愛しい妹……」

零は眼をかるく伏せ、手を見つめる。何か、思い出しているようだ。

「俺は、もう一度、パールとあいまみえる為に——俺達はあの人の下についた」

カシャン、と零はツキアに鎌を向ける。

「動くな。下手なことをすれば……お前の妹が一人、消えるぞ」
その言葉にツキアは視線を巡らせた。ルナの首筋には壱の剣があられている。

「…判った。お前達の云う通りにする。だから……」

「だから？ 妹には手を出さなってか？」

ニイと晒った零に語尾を奪われる。心底面白そうに歪められた碧色の眸。壱はそれを見ながら溜息を吐いた。

「兄さん。やつかむのやめなよ。ちよつと醜い」

「五月蠅い。なあ、お前、自分が幸せだって、判ってっか？」

一瞬にして、零は苦く、沈痛そうな顔になった。あまりにも傷ついたような顔をしたから、ツキアは少したじろぐ。

「家族と……大事な存在と、ずっと一緒に居られるって、どれだけ幸せか、お前に……判るのかっ!？」

最後に、零は叫び、鎌をツキアの首筋から勢いよく引いた。

ツキアの首から勢いよく鮮血が飛び散った。

迎えに？

「家族と……大事な存在と、ずっと一緒に居られるって、どれだけ、幸せか、お前に……判るのかっ!？」

目の前で、兄が斬られた。

「兄、さん……? ツ、兄さんっ!! ツキア兄さんッ!？」

悲痛な叫び。ツキアはそれを訊いて、少し痛みと違う痛さに、貌を歪めた。

「は、あ……ッ! つ……!!」

浅いが、頸動脈が近かつたせいか血が大量に出る。だが、すぐに治癒の力がはたらいて、傷は埋まる。

「チッ。ウゼエー力……」

「兄さんも持つてるじゃないか。と、いうか……その子殺して……パールに嫌われないの?」

「……それは厭だ」

零はばつが悪そうな顔をし、壺を睨む。

「パール……っ! 逢いたかった。よかった思い出してくれて……ッ!

ザクロは力任せにパールを掻き抱いた。それでも、パールは眼を見開いたままだった。

「もう一度、僕の名を云^よって——パール……………」

「ザク……………」

そう呟いてくれた。だが、どうしても、嬉しくなかった。

「パール？ どうしたの……………」

——信じられなかった

「どうして……………」

——生^なきている

「貴方は…………あの時、もう過去より上回っていたのに…………何故、これまで……………」

確かに魔界の住人、特に吸血鬼^{ヴァンパイア}は長命だ。場合によっては、不死の者もいる。

「まあ…………昔は僕も体弱かったけどさ…………。そこまで驚く……………」

「おつ、驚くわよっ！！ あれから…………！！ あれから何年経っていると思っっているの…………ツ…………？」

「……………四千……………位……………」

「母様が長生きに思えるから止めて」

「いや、実際そうでしょ？」

「……………」

パールはそっぽを向き、ばつの悪そうな顔をする。ザクロはくすり、と微笑う。

「パール…………僕と、来てくれる？」

その言葉に、パールは少し硬直する。

「……貴方、と……？ 何処に、行かつて……？」

「僕の城、神楽城^{カグラ}へ。来て……じゃないと、僕は——君の大切な存在を殺してしまうかもしれない……」

パールは答えを見いだせず、眼を限界まで見開いたまま、ザクロと対峙した。

——どうすればいい？

此処には、自分の大切な人達が居て、大切な思い出もある。
だが、ザクロの傍にはきっと自分の兄が居て——もしかしたら、ルビが居て。

——自分は、どちらを選べばいい？

パールは、俯く。

「私には……選べないよ……だって、どっちも大切なもの——ッ——」

パールは涙を溜め、ザクロを見上げた。

「——パール……」

ザクロは、幾分悲しそうな顔をした。

迎えに？

ほろほろと涙を零す。

「御免なさい、私は……選べないよ………ッ」
嗚咽混じりにパールは云う。

——君を……泣かせたかった訳じゃないのに………
自分は、何をしているのだろう。

彼女を殺したいほどに憎み、愛し。

彼女を切望した。

いつまでも、傍に居てくれると、云ってくれた存在。

その、大切な存在を、泣かしてしまった。

ザクロは優しい手つきでパールの髪を梳いた。

膝まである髪は、さらりと細く綺麗だった。こんなにも長いのに、
何故絡まないんだろう、と苦笑交じりにそう思った。

「パール……」

綺麗な銀髪を一房持ち上げ、サラサラと手になじむ髪に軽いキスを落とした。

「泣かないで……パールに泣かれたら、零と壱に怒られちゃうよ……」

冗談を含ませ、そう云い訊かせる。少し経った後、パールは小刻みに肩を震わせた。

「ふふ……そうね。こんな姿見られたら、兄様達に心配かけてしまうし、ザクロが怒られてしまうわね……」

久しぶりに見せてくれた綺麗で華やかな微笑み。

それを、もっと見たいと望んだ。

「パール……もっと笑って……その綺麗な笑顔を……もっと僕に見せて……」

うつすらと、柔らかい微笑みを向ければ、パールは少し照れくさそうにした。

パールは少し俯いた後、ザクロを見上げながら、こう云った。

「ザクロ……もう少しだけ、待って……お願い、もう少しだけでいい。その間に、決めるから……」

パールの顔は、今にも泣きそうに歪められていた。

「……その言葉、信じるよ……パール。もう少しだけ、待ってあげる……」

ザクロはパールの髪を梳きながら眼を細め、云った。

「もし、答えが決まったら、僕の名前を呼んで、パール……」

ザクロはそれだけ云って、パールの目の前から消えた。

「ザクロ……御免、なさい……ザクロ……」

パールの頬に、一筋の雫が零れた。

「零、壱、帰るよ。パールはまだ答えを見いだせてないから……」
いきなり現れたザクロに、零と壱以外の二人、ツキアとルナは驚いた。

「ダンナ……パールは、まだ、なんですか……？」

「そゆこと。だから、そんな奴らを構ってないで、帰ろう」

ザクロはルナに一瞥をくれる。その一瞬、悪辣に晒っていた気がし、ルナは肩を震わせた。

「ねえ、ツキア……なんで君は吸血鬼ヴァンパイアなのに——金髪なんだろ
うね——」

悪辣に晒い、ザクロはそう云う。

「それが、どうしたんだよ……」

ツキアはザクロを睨みあげた。ザクロは臆することなく、続けた。

「知ってる？ 金髪ヴァンパイアの吸血鬼には……“影”が存在する事を——
——」

ザクロはそのまま消え、零ときもそれを追うように消えた。

「俺とお前は、二人で一つ。俺はお前——お前は俺——」

影の有るべき場所に光あり？

金髪ヴァンパイアの吸血鬼には“影”が存在する――。

男はそう云って帰って行った。

「……影………」

知らない、そんなもの、訊いたことも無い。

大魔王・ダイヤに訊いたが、言葉をあやふやに濁され、答えてもらえなかった。

つまり、知っているのだ。金髪ヴァンパイアの吸血鬼ことの影――。

書庫室に行こうとすれば、ダイヤ付きの使用人どもに止められてしまう。

「なんで……俺が知っちゃいけねんだよ……ッ!!」

金髪ヴァンパイアの吸血鬼である自分が、何故知ってはいけない。

さらり、と少し長めの前髪が眼にかかる。
「うざったい……」

それをダルそうにそれを掻き上げ、息を吐く。

「あいつが……俺の存在に気付くのは、いつになるのやら……」

ヴァンパイア
金髪の吸血鬼。

それには“影”が存在する。その、存在理由は判らない。

いつから、そんな存在が居たのか。何故そんな存在が出来たのか。

「旦那は教えてくれないしな……」

ズルイ、と呟く。

——月明かりの影

そう、あいつは俺の光。

そう、俺はあいつの影。

だから、名は“カゲキ”。

容易、だと思った。

——俺が存在する理由は何だ？

何故あいつは彼女の傍に居られる。

自分は代償を払ってまで彼女に逢おうとしているのに。

あいつは何故、何も払わずに彼女の傍に居れる。

「なんで、そんな……不公平なんだよ……ッ!」

自分はただのあいつの影。

なのに、どうして此処まで扱いが違うのだ。

「ズルイ……あいつが、旦那が……」

ギリツ、と手を握り締め、そこから血が滲みだした。

でも、いつか、あの場所を掴んでみせる。

彼女の……自分に光をくれた、パールの傍に……いつか、自分が
其処に立ってみせる。

「それまでは……譲ってやる……その場所を……貸してやる……」

絶対に、手に入れてみせる。

永遠の安寧を――。

影の有るべき場所に光あり ？

サラリと鮮やかな銀髪を撫でる。

「パールと一緒に……」

ザクロはそう呟く。

銀髪の主——ルビはされるがままになっている。

撫でていた手を頬に移動させればルビは頬擦りをした。ザクロはそれを見て微笑った。

「——まるで人形だ……」

自分を真つ直ぐに見つめる無機質な紅色の瞳。自分と同じ——だが、彼女は光を失っていない。自分のように禍々しくない。

「ねえ……君を殺したら、パールは泣くかなあ？ 全てに希望を失い、僕に縋ってくるかなあ？」

クスクスと自嘲気味な笑みをたたえ、ザクロは涙を流す。

「どうして、君は……そんな眼で僕を見るの？ 全てを失っているのに、なんでそんな見透かしたような眸で僕を見るの——？」

慈悲が欲しい。加護が欲しい。彼女が欲しい。

愛されなかった。抱き締めてもらえなかった。笑いかけてもらえなかった。

——だから願った。

愛してほしかった。抱き締めてほしかった。笑いかけてほしかった。

それにくれたのは、パールだった――。

小さく非力で脆弱な自分を愛してくれた、抱き締めてくれた、笑いかけてくれた。

彼女が自分の世界の全てだ。彼女が自分の世界の主軸だ。

両親^{おや}から愛されなかった自分を愛してくれた唯一の存在。

それを狂おしいほどに愛した。欲した。

「君は、それを軽蔑しないでくれるかな……？」

ザクロはルビを抱きよせた。

「別に、俺達もダンナを軽蔑したりしないけど？」

唐突に訊こえた声に驚いて、ザクロは扉の方を振り返った。

「^{メカミ}煤皇、^{カガミ}嘉皇……」

黒髪に銀の眸の青年――煤皇。白髪の金の眸の少女――嘉皇。二^に卵性^{らんせいそうせいじ}双生児だ。

「煤皇の云う通り。僕達はダンナ様を軽蔑したりしませんよ――」

―むしろ尊敬ですね」

嘉皇が煤皇に向かって笑いながら云えば煤皇は淡く微笑み、続けて云った。

「嘉皇の云う通り。俺達はダンナを信じて尊敬しているからダンナの傍に居るんです！」

ビシ、と指をさされ断言される。ザクロは少しばかり啞然としたが、そのあと笑いだした。

「フ、ハハ……！　アハハハハ……ッ、そっか……尊敬かあ……フフ……！！」

腹を抱え、ザクロは笑い続けた。

滅多に笑わないザクロが笑っているのが嬉しくて、二人は貌を見合わせて微笑んだ。

「兄さん、姫様の様子はどうだった？」

ルナの質問にツキアは首を振って答えた。

此処最近――パールはともに食事を摂れておらず、食べたらそれに拒絶反応が出るのか戻してしまう。

せめて水分だけでも――と飲み物を飲ますがそれも戻してしまう始末。

不愉快な絶食状態が続いている。

現に、ツキアが持っている御盆の上にも手がつけられてない食事がある。

「せめても、と思って御粥にしたが、無理そうな雰囲気だった……」
ツキアは歯切りする。

「なんで……ちゃんと護れなかったんだろう……」

ギリ、と拳を力を込めて握る。爪が喰い込んで痛い。だが、パールの精神的傷に比べれば可愛いものだ。

大事な存在を護れず、自分の謎も不説明。
自分の無力さに打ちひしがれる。

「俺は……自分の無力さが憎い……ッ！！ 姫を十分に助けてあげられない……！！」

悔しい。何故これほどまでに自分は弱いのだろう。

「俺に……もつと……姫を護れる力があつたら……」

あの方を、あの小さな肩を抱いて上げられるほどの勇気と力があれば……彼女は笑ってくれるだろうか？

力が、欲しい――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4175o/>

魔界の女王

2011年10月5日07時23分発行